SRI SATHYA SAI RAM NEWS

LOVE ALL SERVE ALL
HELP EVER HURT NEVER

No.220 / 8月号 / 2023

CONTENTS

◉ サイの御教え

「アヴァターはなぜやって来るのか」
「小さな”私”を克服しなさい」

◉ サッティヤム・シヴァム・スンダラム

◉ Sri Sathya Sai Baba 様ご生誕100周年記念ヴィジョン

「人生は愛、分かちあいなさい」

◉ ワカ チンナ カタ　「母親の役割」

◉ サイと共に

◉ 帰依者体験談

◉ プラシャーンティ ニラヤム 便り

◉ 活動報告：スタディー サークル

◉ 活動報告：全国センター・グループ活動

サイの御教え

アヴァターは なぜ やって来るのか

1983年クリシュナ降誕祭の
ババの御講話

デーホー デーヴァーラヤハ プロークトー
ジーヴォー デーヴァハ サナータナハ
——永遠なる至高者は新たなジーヴァとして
生まれて人体という神殿に宿る

そのために、アヴァター（神の化身）はすべて、人の姿をまとうのです。聖典は、神は信愛に服従する、と明言しています。

ギーターの中で、主は人においては識別力すなわちブッディ（知性）である、と明言しています。人は、あらゆる形態の富を手に入れることで偉大さを得ることはできません。人を尊敬に値するものにさせているのは、知性の存在です。その識別力を発揮しない者は、鳥や獣にも劣ります。

神がアヴァターとなって降臨するのは、人間をより高いレベルに引き上げるためです。アヴァターとは、降りることを意味します。大切に世話をするために身をかがめて子供を抱き上げるため、そして、つまらないものを欲したり追求したりすることにとらわれている人間を引き上げるために、神は人間のレベルまで降りてきて、どうすれば人が自らを神格化できるかを教えます。これはギーターが説いていることです。聖書やコーラン、その他、どの偉大な聖典も、すべて同じ目的のためにもたらされました。聖典それ自体が人間を救済することはできません。

聖典は道標としての役割を果たすのみです。聖典は神を悟るために進むべき道を示しています。

巡礼は罪をぬぐい去るものではない

すべてのアヴァターはプールナ・アヴァターであり、神のすべての属性を持っています。しかし、シャーストラ（天啓経典）は、クリシュナ・アヴァターだけが16の側面すべてを備えた完全な化身であるとしてきました。全能であるにもかかわらず、クリシュナは信者にとって容易に近づくことのできる存在でした。クリシュナは信者に服従しました。私たちが信愛に満たされているとき、主はいつでも私たちの下僕として仕えることができるのです。信者を守るため、あるいは助けるためには、主はどんな困難や試練にも身をまかす用意があります。多くの信者が、クリシュナを讃える歌を歌って、自分はクリシュナが降臨した時代に生まれてクリシュナの神聖な音楽を楽しむこと、クリシュナの神聖な御業を目にすることができなかったと嘆いています。つまらない欲を捨てて神への信愛から生じる至福を求めることのできない、鈍い、不信心な者たちを批判している信者もいます。

多くの信者がベナレスやプラヤーグといった聖地を巡礼するのは、そうすれば罪を免れることができるだろうという望みがあるからです。巡礼は罪を帳消しにする手段ではありません。必要なのは、ハートと心（マインド）の浄化です。もしサーダナ（霊性修行）によってマインドが浄化されれば、神性は自ずと姿を現すでしょう。

聖女ミーラーは、これと同じメッセージを、心にガンジスとヤムナーに行くよう呼びかけるバジャンを歌って伝えました。ここでのガンジスとヤムナーというのは、北インドの川のことではなく、私たち一人ひとりの吸う息と吐く息、つまり、イダーとピンガラというナーディ〔霊管〕のことです。眉間がガンジス川とヤムナー川の合流点であるプラヤーグであり、そこに集中することでクリシュナを発見することができるのです。そこをミーラーは、涼やかで、清らかで、平穏な場所であると表現しています。息を吸うことと吐くことは、人が取り込むべきものと拒むべきものを象徴しており、息を止めること（クンバカ）は、人が持ち続けるべきもの、つまり神を意味しています。人は、清らかなものを取り込み、清らかでないものを拒絶すべきなのです。

主は帰依者の切望に応える

ギーターは3つの指示を述べています。それは、困難を恐れない、神を忘れない、偽物を崇めない、です。この3つを守ることによって、昔から数え切れないほどの信者が、サーダナを通じて神を悟ろうとしてきました。

バーガヴァタは、主は信者の切望にいかに応えるか、そして、主との別離によって引き起こされる苦悩をいかに解消するかを示しています。クリシュナがマトゥラーの都に向かった時、ゴーピー（牧女）たちは、別離に耐えられず、悲しみに暮れていました。ゴーピーたちは、いつクリシュナは戻ってくるのかと、ずっとマトゥラーの方を見ていました。ある日、ゴーピーたちは、土煙が上がっているのを見つけ、ついにクリシュナが折れてゴークラムに戻ってくるのだと思いました。そこには一台の馬車と、その中に座っている一人の男が見えました。馬車は止まりましたが、そこにクリシュナの姿はありませんでした。ゴーピーたちは、至高の神にハートを明け渡していたので、その見知らぬ訪問者を見ようともしませんでしたが、その男はクリシュナのとても大切な友人、ウッダヴァその人でした。牧女たちの苦悩を察したクリシュナが、牧女たちを慰め、元気づけようと、ウッダヴァを遣わしたのです。

ウッダヴァは、馬車から降りたそばから牧女たちに長い説教を始めました。

「ああ、牧女たちよ！ あなた方はシャーストラを知らないのだ。あなた方には知恵がない。あなた方は、愚かで鈍い人々のようにクリシュナに恋い焦がれて

いる。もしシャーストラを知れば、クリシュナは常に自分と共にあることに気づくでしょう。クリシュナはあなた方のハートの中に住んでいるのです。クリシュナが自分の中に住んでいることを喜ぶ代わりに、あなた方は生身のクリシュナを恋しがっています。それは無知によるものです。クリシュナが私を遣わした目的であるヨーガの科学を、私があなた方にお教えしましょう」

ウッダヴァとゴーピー

牧女たちは、見知らぬ人に直接話しかけるのは適切ではないと考えました。そこで、ウッダヴァに返事をするのに、蜂に話しかけるという方法をとりました。ゴーピーたちは言いました。

「ああ、蜜蜂よ！ その言葉（ウッダヴァの言葉）は、クリシュナとの別離のゆえに私たちの中で燃えている火に油を注ぐようなものです。そのような言葉はもうたくさんです」

するとウッダヴァは、クリシュナが牧女によこした手紙を差し出して言いました。

「これはクリシュナからあなた方へのメッセージです。せめてそれを読みなさい」

あるゴーピーがすぐにこう言いました。

「ああ、蜜蜂よ！ 私たちは文盲の村人です。私たちは悲しみに打ちひしがれています。私たちにクリシュナを見せてください」

もう一人のゴーピーは泣き叫びました。

「クリシュナがいないことで、私たちは苦悩の炎に焼かれています。もし私たちがその手紙に触ったら、手紙は灰になってしまうかもしれません。私たちは触りません」

さらに別のゴーピーは言いました。

「私たちの目から流れ落ちる涙が、クリシュナお手紙の真珠のような文字を汚してしまうでしょう。私たちはクリシュナのメッセージを見ていられないでしょう」

するとウッダヴァは言いました。

「少なくとも、私のメッセージには耳を傾けなさい。私はあなた方にヨーガの知識をお教えします」

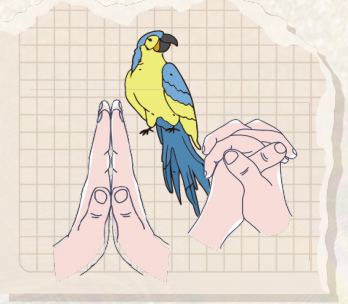
ある牧女が、悲しみを抑えきれずに、蜜蜂に向けてこう答えました。

「ああ、蜜蜂よ、私たちには心は1つしかありません。そして、それはクリシュナと共にマトゥラーに行ってしまいました。もし私たちに4つの心があれば、1つはヨーガに、もう1つは他のことにといった具合に、使い分けることができたでしょう。ですが、私たちが持っていたただ1つの心は、クリシュナに託してしまいました。もはやどんなヨーガの教えも受ける余裕はありません」

ウッダヴァは、クリシュナへのゴーピーたちの一途（いちず）な信愛に気づき、茫然（ぼうぜん）となりました。

すべてのヴェーダとシャーストラの真髄は、一途であることです。一途であることが、神への一意専心の信愛をもたらすのです。自分はゴーピーたちが示したような一途な信愛を培ってこなかった、とウッダヴァは心の中で反省し、クリシュナのもとへ帰ることに決めました。

ラーディカーがクリシュナに伝えた悲痛なメッセージ



ゴーピーたちの中でクリシュナ神の最高の帰依者は、ラーディカー〔ラーダー〕とニーラジャーでした。ウッダヴァは、立ち去る前、二人が鸚鵡（おうむ）をクリシュナ神に見立てて、自分たちの悲しみに打ちひしがれたハートを癒してください、と懇願しているのを聞きました。ウッダヴァは、意識を失って砂地に倒れているラーディカーに、クリシュナに伝えてほしいメッセージがあるかどうか尋ねました。我に返ったラーディカーは、クリシュナだけを思っていました。ラーディカーはこう言って泣きました。

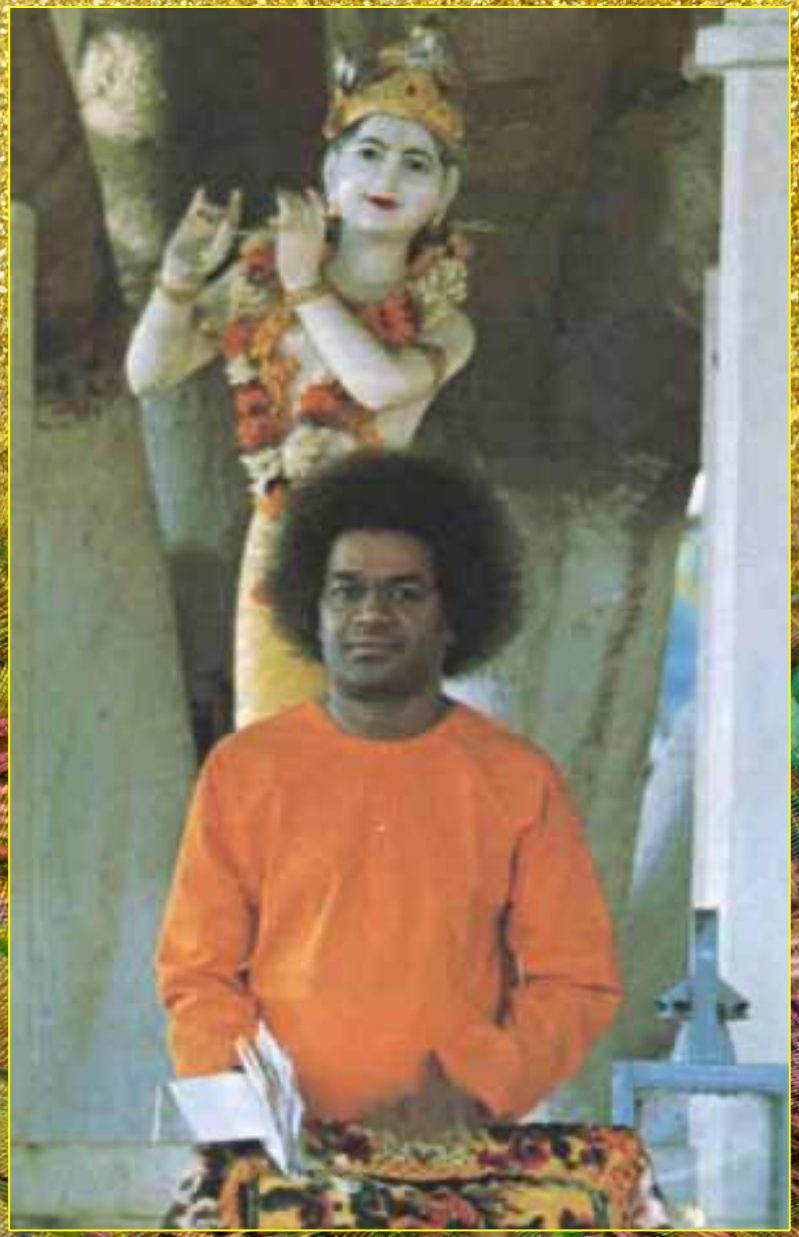
もしあなたがそびえる木であったなら
私は蔦（つた）のようにあなたに
からみつくでしょう
もしあなたが野に咲く花であったなら、
私は蜜蜂のようにあなたの上を飛び回るでしょう
もしあなたがメール山であったなら、
私は滝のようにあなたへと流れ落ちるでしょう
もしあなたが限りなく広がる空であったなら、
私は星のようにあなたの中にいるでしょう
もしあなたが底知れぬほど深い谷であったなら、
私は川のようにあなたの中に流れ込むでしょう
どこにいるの、ああ、クリシュナ！
どこに行ってしまったの、クリシュナ！
あなたに憐れみはないのですか、
クリシュナ！ クリシュナ！

神への愛が手段でありゴールである

ラーディカーのこの哀れな状態を見て、ウッダヴァのハートは溶けました。ウッダヴァは、クリシュナが自分をゴーピーたちのもとに遣わしたのは、真のバクティ（信愛、神への愛）とは何かを学ばせるためであったのだと悟りました。ウッダヴァは、シャーストラをよく知っている人でも、ゴーピーがクリシュナに対して見せる一点集中の混じり気のないバクティから真のバクティに関する内なる真実を学ばなければならない、ということをウッダヴァに示すために、クリシュナはこのエピソードを上演したのだということに気が付きました。神への愛は、手段であり、ゴールです。これはゴーピーたちによって明らかにされた極意です。ゴーピーたちは、この世を愛で満たして渇いた大地に愛をあふれさせたクリシュナの笛の音の中で、あらゆるものの内に愛を見ました。

神は万人の内にいます。しかし、それを悟るための道はただ一つしかありません。それは、神への熱烈な愛を培うことです。人がそのような神への愛を育てるために熱心に努力する日こそが、クリシュナの誕生日なのです。クリシュナは、どのゴークラアシュタミー（クリシュナの誕生日）の日にも生まれてはきません。クリシュナは、私たちが自分の束縛を克服する手段として聖なる愛を身に付けようと努力する時に、私たちの内に生まれてくるのです。クリシュナの教えに従って生きることこそが、クリシュナの誕生日を祝う真の方法なのです。

サティヤ サイババ述
クリシュナ ジャンマアシュタミー
〔クリシュナ神降誕祭〕
プラシャーンティ ニラヤムにて
1983年8月31日
Sathya Sai Speaks Vol16. C23



ॐ

ババからのお手紙

小さな「私」を克服しなさい

1974年1月13日

私のいとしい男子諸君、

すべての人に自分自身を作り直させましょう。人が生きているのは、金もうけのためでも、自分の欲求を満たすためでも、学問や知的才能のためでもなく、霊的な成長のためであるということを理解させましょう。

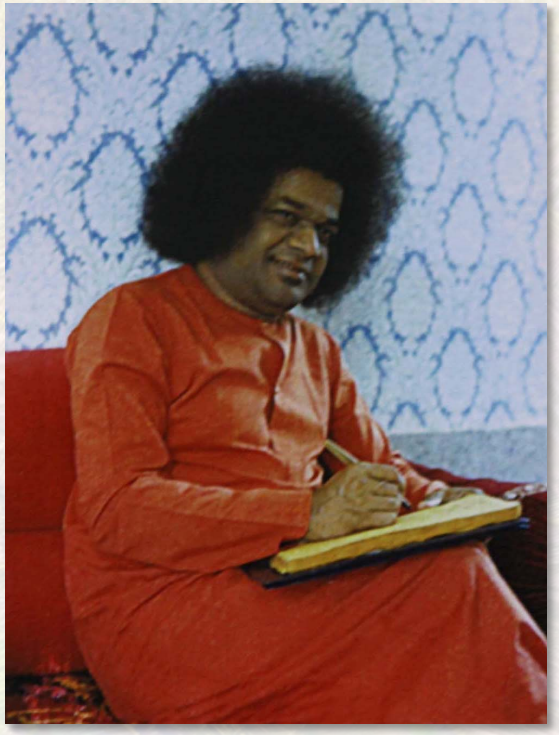
過去のカルマ〔行為〕の影響は、プレーマ〔神聖な愛〕によって裏打ちされたカルマによって消去されるべきです。すべてのカルマにはプレーマという背景がなければなりません。

霊的な進歩は、この世でのみ可能です。エゴの滅却と欲望の消滅は、この世で、今、得ることができます。それまでは、必ずこのはかない世を行き来することになります。食欲、欲望、野心、小さな「私」の衝動、エゴ〔アハンカーラ〕、ヴァーサナー〔過去生から持ち越された潜在的傾向〕、ヴィカルマ〔非行〕、ラーガ〔執心〕、ドウェーシャ〔憎悪〕――これら、マーヤーの世界つまりこの見かけと幻想の世界を構築してきたものすべてを、克服しなさい。

ハートの中にプレーマの光がないために、蝙蝠（こうもり）や夜行性の鳥がハートに侵入し、ハートを汚してしまいます。蝙蝠というのは、憎しみ、貪欲、うぬぼれといった邪悪な性質のことです。

祝福と共に
ババ

Prema Dhaara Part2 6P



サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第53回

1982年に、シュリ・サティヤ・サイ・オーガニゼーションの世界評議会のメンバーは、1985年11月にババの60歳の御降誕祭を世界的な規模で祝う許しを求めてバガヴァン・ババに祈りを捧げました。ババは乗り気ではありませんでしたが、最終的に、その祝典は拡大し続ける奉仕活動の流れの支流という性質を伴ったものであり、帰依者のためにも世界のためにもなるということを認めて、譲歩してくださいました。

1970年の第4回全インド大会では、シュリ・サティヤ・サイ・オーガニゼーションの主要な目的を明確にするべく、バガヴァン・ババはおっしゃいました。

「雨粒は、水の流れや川にならないかぎり、自らの源であり目的地でもある海にはたどり着きません。それと同じように、神の帰依者たちはアーナンダ〔至福〕の海の雨粒です。それゆえ、帰依者自身が流れや川となって自らの源へと戻らなければなりません。サティヤ・サイ・セヴァ・オーガニゼーションは、世界のさまざまな所からやって来る帰依者たちを、言語、宗教、カースト、肌の色、国籍など関係なく一つにし、サイのセーヴァカ〔奉仕者〕一人ひとりを神へと戻す、流れです」

人生の究極のゴールへと皆で共に到達するという概念は、モークシャ〔解脱〕に対する昔ながらの個人主義者的な手法に照らし合わせると、とりわけインドにおいては革命的な概念です。人は、自らの救済を追求する中で、社会のためになることを無視することはできません。この二つは互いに補い合っていますし、手に手を取って進んでいかなければなりません。社会奉仕の霊的な目的が、これほど強調されたことはありませんでした。共に協力して、救済の道を進んでいきなさいという、ババから帰依者たちへの明快な呼びかけは、そのころまだ5歳だったサティヤ・サイ・オーガニゼーションに大きな刺激を与えました。

それから15年で世界中のオーガニゼーションが驚異的な成長を遂げたことは、1985年11月にプラシャーンティ・ニラヤムで開かれた第4回世界大会ではっきりしました。大会には、46か国から、1万3千人の代表と40万人の帰依者が参加しました。大会のテーマは「国際社会の統合」でした。バガヴァンが14歳で世界に向かって自らの使命を宣言なさった時に人類のハートの中に蒔かれた種が、45年後に巨大な木へと成長を遂げたのです。

プールナ・チャンドラ講堂の収容人数の限界と、世界大会と御降誕祭に必死で詰めかけてくる大勢の帰依者たちを考慮して、開会式以外のすべての式典はヒル・ビュー・スタジアムで行われました。1984年のセヴァダル大会以来、ずっとバガヴァン自らが、ヒル・ビュー・スタジアムを世界大会と御降誕祭に向けて整えることに強い関心を示してこられました。というのも、予想される何十万人という帰依者をスタジアムだけで収容することができるからです。スタジアムの地ならしや清掃、ステージ「シャーンティ・ヴェーディカ」の建設、丘陵斜面の観覧席の拡張といった、準備に関する詳細の一切をバガヴァンが手ほどきされ、指揮されました。

40年近くババの側に仕える機会に恵まれ、サイ・ムーブメントが幼い苗木からすべての大陸に根を下ろす力強い世界的な大木へと成長したのを見守ってきたシュリ・N・カストゥーリは、17日の朝、プールナ・チャンドラ講堂に集まった世界大会の代表者たちを迎える際、感極まった、声にならない声で言いました。

「1968年の第一回世界大会の時、スワミは、アヴァターの呼び声に応じて地球の平和と人類の友好を求めてやって来た群衆に、私は人が神と崇めてきたあらゆる御名と御姿の内にいる、と宣言なさいました。今回は四回目の大会であり、すべての大陸か

らやって来た莫大な数の代表者たちは、貪欲や傲慢や憎悪という毒に対する唯一の処方箋は愛と奉仕と平静である、というサイのメッセージを何百万という人々が受け入れたことを立証しました。今大会のテーマは『国際社会の統合』です。実に、私たちは、その御心によってすべての人類を一つにすることができるお方の面前にいるのです！」

1967年から1975年にかけてサティヤ サイ オーガニゼーションの初代全インド会長を務めた、1975年発足の世界評議会の初代委員長は、創設から20年におよぶ世界中のサティヤ・サイ・オーガニゼーションの成長を振り返って、こう宣言しました。

「この20年で、サティヤ・サイ・オーガニゼーションはバガヴァン・ババの使命のほんの一部でしかないということが明確になりました。ババは、私たちが思いもよらない、ババご自身のやり方で、100におよぶ段階や層で働き続けておられます。サイ・オーガニゼーションはバガヴァン・ババであると見なされますが、逆はそうではありません」

大会の開会式にあたって、バガヴァンは、無私の奉仕のみがサイを喜ばせると明言なさいました。セヴァは至高のサーダナであると宣言し、バガヴァンはこうおっしゃいました。

「カルマのゴールはグニャーナ〔英知〕であり、グニャーナにとってカルマは基盤です。実践において二つを組み合わせることが、セヴァ――無私の奉仕です。セヴァより偉大な霊性修行はありません。三界を統べる至高の主、シュリ・クリシュナは、人類の運命を宣言するためにやって来たとき、自ら動物や鳥に仕えました。クリシュナは愛をもって馬や牛に仕えました。クルクシェートラの大戦では、クリシュナは剣を振おうとせず、単なる御者となることに満足しました。そうすることで、クリシュナは無私の奉仕の理想を示して見せたのです。

サイの哲学は、部屋の片隅に座って息を整え、『ソーハム！ ソーハム！』と唱え続けるよう帰依者を鼓舞するためにあるのではありません。『ああ、サーダカよ！ 立ち上がりなさい！ 気を引き締めて！ 社会奉仕に身を投じるのです！』――これがサイのメッセージです。五感を制して、社会奉仕に没頭すべきです。セヴァのない人生は、闇に覆われた寺院と同じです。そこは悪霊たちの住みかです。セヴァの光だけが、霊性の求道者を明るく照らすことができるのです。

あなた方はここに、世界中の遠い所から、多額の費用をかけて、大変な思いをしてやって来ました。やって来たからには、善い考えや気高い思いを吸収するよう努力すべきです。そうすれば、自分は人の模範となるような人生を送るのだ、人生を崇高なものにしてくれる価値のある行いに従事するのだ、という決意を携えて帰途に就くことができます。これは私からあなた方皆への祝福の言葉です」

御講話を終えるに当たって、バガヴァンはこうアドバイスなさいました。

「おしまいに、あなた方に二つの指示を与えたいと思います。それは、あなた方にこの大会の意義を理解させてくれるでしょう。一つは、『自分が人に説くことを自分が実行していること』、もう一つは、『自分が実行していないことを人に説かないこと』です。もし、あなたが何かを語り、それを自分で実行していないなら、それはペテンです。もし、自分が語っていることを実行しているならば、それは偉大さを示すものとなります！」

その後の三日間、参加者たちは、国際社会の統合を促すという目標にのっとってサイ・オーガニゼーションの活動をさまざまな側面から考えるために、いくつかの分科会に分かれました。分科会では、霊性修行、人間的価値教育、バルヴィカス、セヴァダル、地方の発展、慈善トラストや財団の設立といったテーマについてじっくりと話し合いがなされました。

大会の閉会式は、21日の朝、ヒル・ビュー・スタジアムで行われました。世界評議会のメンバーである合衆国の博士が、歓迎の挨拶で、世界中の帰依者すべての大望をバガヴァンに提起しました。

「親愛なるバガヴァン、数多くの遥かなる地、人の住む地上のすべての大陸、46の国からやって来た、あなたのつつましやかな帰依者たちは、人生とは貴いものであり、あなたが与えてくださった意識の続

く期間であることを、認識しています。私たちは、このきわめて貴重で神聖な宝を浪費しないことを、固く誓います。私たちは、今日ここでなされた決定事項を実行できるよう懸命に努力すること、そして、我々自身に対し、それぞれの参加国の兄弟姉妹たちに対し、また、世界全体に対して、サイの帰依者としての自分の務めを果たすことを、誓います。どうか私たちが、あなたの慈悲の中で、いつも、誠実に、そして効果的に、神の大義のために働くことをあなたが許してくださるよう祈ります」

世界評議会の副会長が、大会の決定事項と提言のレジュメを提出しました。今大会においては、まずサイ・オーガニゼーションの内部の統合を望みました。国際社会の統合へ向けての第一歩として、大会では、次の四つの目標の下に各国でいくつかの共通プログラムを始めることが指示されました。

1）国民の健康と福祉
2）霊的な基盤の強化
3）サティヤ・サイ・アヴァターのメッセージを広めること
4）欲望に限度を設けること

大会の閉会式の歴史的な御講話で、バガヴァンはこう明言なさいました。

「私はこの世から一つの捧げものだけを受け取ります。それは愛です。それは、奉仕として、兄弟愛として、心の優しさとして、思いやりとして現れた、神聖な無私の愛です」

現代における世界の危機的な状況について、バガヴァンはこうおっしゃいました。

「多国からここに集まった世界大会の代表者たちは、異なる文化、伝統、言葉、衣服のスタイル、食べ物等々を有しています。しかし、この多様性が、私たちのヴィジョンである、皆さん方すべての中に本来備わっている神性という一体性を隠すようであってはなりません。今の世界は、手ごわい問題や、急速に広がりつつある恐れにさいなまれています。戦争への恐れ、飢饉への恐れ、悪魔のようなテロリストへの恐れ、民族的、宗教的、地域的争いという問題、経済復興、経済存続の問題、学生たちのしつけの問題、教義の衝突の問題、狂乱や狂信の問題、権力の横領と極端な利己主義の問題。徐々に広まりつつあるこうした恐れへの救済策は、ヴァイラーギャ（霊的な眼識に基づいた無執着）という態度です。体と心から成るものと、『私』と『私のもの』という制限に執着するなら、恐れは回避できません。アドワイタ（不二一元論）的な意識、すなわち、自分が目撃しているものは実在の上にある自分の心に焼き付いているものにほかならないという意識こそが、最良の治療薬であり、奉仕はもっとも効果的なサーダナ（霊性修行）です」

御講話の最後に、ババはオーガニゼーションの会員やワーカー、そして、すべての帰依者たちに、人生で実践すべき10の指針を与えてくださいました。その「神へと至る10の道」〔10の訓令〕は、本書の最終章、「世界教師」の中に掲載されています。

第四回世界大会は、地球規模での、霊性、教育、奉仕活動の成長、という点で画期的なものとなり、それらの活動はその後の10年で100ケ国以上に広まっていきました。合衆国の夫人いわく、「それは本当に、けた違いに大きな、国際的な出来事であり、バガヴァンへの愛によってつながれた魂たちの霊的な大会でした」。ニューヨークの心理学博士は、この世界大会を、「人類の霊的進化における記念すべき第一歩、転換期であり、重要な過渡期」であったと感じました。

大会の一年ほど前に、インド国内外のサイのセンター、ユニット、慈善信託団体や教育機関に関するすべての関連データが、バガヴァンに提出されていました。誰が世界大会への出席が認められるべきか、バガヴァンに意見が求められました。各ユニットから一人の役員が代表として大会に出席が認められたとして、その場合でさえ優に一万人以上になるということが、その時、明らかになりました。霊性団体の役員の大会が、アヴァターがおられる中で開催されるなどというのは歴史上どこにも見当たらないことです。偉大なる霊的革命を告げようとしている、私たちのオーガニゼーションの驚異的な規模には驚くばかりでした。

シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕１００周年記念ヴィジョン

ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます

人生は愛、分かち合いなさい
― ババ

SSSIOJ会長　住友正幹

そもそも神が、宇宙を創造したのはなぜだったのでしょうか？それを知ることができれば、私たちの人生の意味も明らかになると思われます。なぜ神は宇宙を創造したのか？『サティア サイ エデュケアー理論と実践』には次のように記されています。

最初に、時が始まる前、時間も空間もない状態の中に、「純粋意識」「存在」がありました。それは「宇宙存在」「神」「それ」とも呼ばれています。ヴェーダ聖典では、サンスクリット語で至高者という意味の「プルシャ」と呼んでいます。それはまた「ブラフマン」「アートマン」「イーシュワラ」とも呼ばれています。この宇宙存在は「一」であり、「他」はありません。それから、明らかな原因もなく、至高者は創造したい「多」となりたいという最初の衝動をもちます。「エーコーハム バフッシャーム（私は一なるものである。私は多となりたい）」「それ」は存在を証明したいと欲し、愛したいと欲しました。楽しみたい、戯れたい、喜びを感じたいと欲しました。「それ」はもう純粋な主体もしくは意識のままでいることはできなくなり、愛する対象を創造しなければならなくなりました。愛する対象がなくては愛することがかなわないからです。光はその対をなす闇がなければ、光であることが分かりません。一なるものだけで、共に戯れるものがいなければ、喜びを感じることもありません。こうして「創造」が始まりました。至高者が自らに課さなければならなかった最初の条件は「知らないこと」（アヴィッディア）すなわち無明でした。宇宙存在は、自らを忘れるという最初の犠牲を自らに課さなければなりませんでした。しかしそのことは自身を失うことを意味するものではありませんでした。「それ」は「それ以前」にも完全であり、「それ以降」もまた完全でした。「それ」はあらゆるものに浸透するため、永遠に完全で、創造物の中に内在するようになったのです。「それ」は超越するとともに、内在するのです。

この文書には、宇宙の創造の秘密が記されています。なぜ宇宙は創造されたのか？なぜ人は生まれたのか？人生の目的は何なのか？私たちは神の顕れであるにも関わらずなぜそれを忘れているのか？についてのとても重要なメッセージです。

つまり、神は自らの愛を体験するために、自分自身から自分自身を分離させて世界のすべてを創造したと言われているのです。そうであるならば、私たちの生きる目的は「神の愛」を体験することであり、それ以外には考えることはできません。

ヴェーダにおいても、「生きとし生けるものすべて至福より生まれ、至福に支えられ、そして再び至福と一つになる」（タイッティリーヤ ウパニシャッド3.6）と記されていますので、人生は至福を体験するため、つまり神の愛を体験するためにあることが分かります。

しかし、神のリーラー（遊戯）が成就するため、神は自分が神であることを忘れなければなりませんでした。知らないということを通して知るという体験ができます。忘れているということを通して思い出すという体験ができます。無明やマーヤー（幻想）はそのための必要条件だったのでしょう。

私たちは神の愛を体験するために生まれてきた神です。神を愛し、神から愛されるためです。
神を愛するとは、寺院や教会にある像や祭壇にある写真を礼拝することではありません。人を愛し、動物を愛し、自然を愛し、すべてのものを愛することであり、Love All Serve Allを生きることです。その愛は、無私の愛、無条件の愛、無償の愛を意味しています。無私の愛とは「私」に関係するものから生まれるものではなく、分け隔てのない真の愛です。

私たちは、家族愛、夫婦愛、兄弟愛、男女の愛など、「私」という個人に関係するものから生まれる愛を愛だと思っています。世界の文化を見ても、映画や小説、歌や芸術は人間の愛をテーマにしたものが多く、また、私たちの人生においてもそれらの愛は生きる喜びを与えてくれるものです。

しかしスワミは、世俗の愛は執着に過ぎず、真の愛

を求めるべきだと以下のように説かれています。

神の愛（プレーマ）について言うならば、99パーセントの帰依者はプレーマが何を意味しているのか理解していないことを、ここではっきりと説明しましょう。この愛は世俗の感覚で解釈されています。これは人に道を誤らせます。夫婦、母子、友人同士、親戚知己の間にある執着は、すべて大ざっぱにプレーマと表現されていますが、これらの執着は、束の間の人間関係の結果であり、本質的にはかないものです。プレーマはトリカーラ アバーディヤム（過去・現在・未来という時の三相を通じて永続するもの）です。そのような愛は、神と帰依者の間にのみ存在するものであり、他のどんな類の人間関係にも当てはめることはできません。神の愛の本質を理解するのは容易なことではありません。皆さんは浮き沈みの影響を受ける世俗の執着だけを認識しています。そのように変化に傾きやすいものを愛と呼ぶことはできません。真の愛は変化しません。それは神です。愛は神です。愛に生きなさい。
—1995年１月14日マカラサンクラーンティの御講話より抜粋

確かに、家族愛や夫婦愛、兄弟愛、男女の愛は個人の関係から生まれるものであり世俗の愛だと言えるでしょう。しかし、世俗の愛の中にも真実の愛の片鱗を垣間見ることもあり、また、真実の愛の中にも執着の香りがあることもあります。では、どうすれば、それが世俗の愛なのか、真実の愛なのかを見分けることができるのでしょうか？スワミは次のように説かれています。

サイババ様の御教え
現代の青年は、愛というものの本当の意味を理解できていません。二元性という気持ちがあるなら、愛は存在できません。不二の愛（エーカートマ プレーマ）が真の愛です。ギブ アンド テイクの関係には、愛の真の精神は映し出されません。何の見返りも期待せずに、ひたすら与え続けるべきです。それが真の愛です。
— 2005年4月13日の御講話より抜粋

真の愛は何の見返りも期待しない愛であり、ただ愛ゆえに愛するということなのでしょう。それに対して世俗の愛は、期待する愛であり、それが得られなければ悲しみや苦しみが生じることになります。

生者必滅、会者定離はこの世の習いであり、この世に生を受けた者は必ず滅び、この世で出会った者には必ず別れの時が来ます。その時、それは悲しみや苦しみに変化してしまうでしょう。
それを回避するためには、それらの一時的な愛を、真の意味において永遠の愛、神の愛に昇華させていかなければなりません。

肉体の眼で見れば、そこにいるのは父親であり母親であり、子供であり、兄弟や姉妹であり、男性や女性です。しかし、心の眼で見れば、家族も夫婦も兄弟も男女もあるいはどんな人もすべての人は、人の姿をとった神さまです。そうであれば、人を人として愛するのではなく、人を神として愛することが大切なのではないでしょうか。そうすれば、私たちの愛は真の愛になるはずです。「世俗の中に神を見て、愛を分かち合う」、きっとそれが「人生は愛、分かち合いなさい」というサイババ様のメッセージの意味ではないかと思っています。

その愛は家族から社会にそして世界へと広がっていきます。なぜなら拡大することが愛の性質だからです。世界には何十億人もの人が生きています。私たちは何と多くの神さまに囲まれて生きていることでしょうか！私たちの人生は多様な姿をとっている神さまたちと愛を分かち合うためにあるのだと思います。

サイババ様の御言葉
神を探す必要はありません。あなたがまさしく神なのです。この真理を悟る努力をしなさい。簡単で易しい方法があります。すべての人が神の化身であるという信念を持ちなさい。すべての人を愛しなさい。すべての人に仕えなさい。神を愛する最善の方法は、すべての人を愛し、すべての人に仕えることです。神は万人の中にいるのですから、万人を愛さなければなりません。すべての人は神の顕現です。
—1995年1月14日の御講話より抜粋

人生は挑戦、それに立ち向かいなさい
人生は愛、それを分かち合いなさい
人生は夢、それに気づきなさい
人生はゲーム、それをプレイしなさい

ワカ チンナ カタ

母親の役割

クルクシェートラ〔マハーバーラタ〕の戦いの後、クリシュナ神はガーンダーリー妃を慰めに訪れました。王妃はクリシュナ神を責めました。「あなたは神様でありながら、なぜそれほど依怙贔屓（えこひいき）なさるのでしょうか？パーンダヴァ家の息子たちは助けておきながら、私が産んだ100人の息子たちのうち、1人さえ救ってくださいませんでした」。クリシュナは答えました。「姉上、私にあなたの息子たちの死の責任はありませんよ。それはあなたの責任です」。ガーンダーリー妃は答えました。「クリシュナ様、そんな風に私を非難するとは、どうしてあなたはそれほど無慈悲になれるのですか？」

クリシュナは答えました。

「姉上、あなたは100人の息子を産みました。しかし、そのうちのたった1人でも愛情のこもったまなざしで見つめたことはありますか？ あなたは目隠しをし続けることを選びました。あなたは息子たちがどのように暮らしているかを見守ることができなかった。あなたの息子たちは、実際、最も不幸な子供たちです。というのも、彼らは母親の優しい気遣いや愛情深いまなざしを受けることができなかったからです。どうして彼らが規律正しく、忠実で、正義感の強いヒーロー〔英雄〕に成長したりできるでしょう？ 母親は最初の教師であり、訓戒者なのです」

「ご自分で、クンティー妃の状況と比べて、じっくり考えてみてはどうですか？クンティー妃は夫の死の瞬間から、息子たちを愛情こめて大切に育ててきました。彼女は宮廷であろうが、蝋（ろう）を塗りこめられた家であろうが、常に息子たちと共にありました。パーンダヴァ兄弟は、決して母親の祝福を受けずに何かをすることはありませんでした。彼らが私の恩寵を手に入れたのは、『クリシュナ様、どうか息子たちをお守りください』というクンティー妃の絶え間ない祈りのおかげであって、兄弟たち自身の才能ゆえではありません。母親の愛情深いまなざしを受ける幸運を得られなかった者たちは、神のヴィジョンを得ることも、神の愛を勝ち取ることもできないのです」

こうして、クリシュナ神はガーンダーリー妃に母親の役割について教示したのでした。

※ガーンダーリー妃：盲目の王ドリタラーシュトラの妻。カウラヴァ家の100人の息子の母親。盲目の夫と心を一つにするため自分の目をショールで固く縛り、夫に仕えた。

※クンティー妃：クル族の王、パーンドゥの妻。ユディシュティラ、アルジュナ、ビーマの母親。

〔出典：インド神話伝説辞典〕

サイと共に

1998年8月9日の会話

スワミは小学校の生徒たちの近くに行かれました。そこではある少年がスケッチを持っていました。

スワミ：（生徒に）これは何ですか？
小学生：スワミ、英語のプロジェクト・ワークです。
スワミ：これは絵ですか、それともプロジェクト・ワークですか？
小学生：いいえ、これは表紙です。

スワミ：（大学の学生に）プロジェクトとは何ですか？
学生：特定のワークをすること、特定の分野を深く研究すること、自習です。

スワミはその答えに満足なさいませんでした。スワミは教師にも同じ質問をなさいました。

教師：スワミ、それは、一つの目標を達成するために多くの考えをまとめることです。

スワミ：考えるだけでは目標を達成することはできません。あなたは、「プロジェクト」という言葉の意味を知らずに、どんなプロジェクトの仕事をしているのですか？
（ホスピタル・ボーイ〔病院のセヴァを担当している男子学生〕に）プロジェクトとは何ですか？
ホスピタル・ボーイ：何かを探求することです。

スワミ：探究するだけですか？
（学生たちに）皆さんはプロジェクトを行っていますが、その意味を知りません。お茶会があるとしたら、あなたはお茶だけを用意しますか？ いいえ、お茶、カップ、ソーサー、その他多くのものが必要です。目的をしっかりと心に抱いていること、それがプロジェクトです。テルグ語で世界を何と言いますか？
学生：スワミ、プラパンチャムです。

スワミ：「プラパンチャム アンテ パンチャブータムラ ヴィカサム」。「プラ」はヴィカスィンチュタ（開花）、「パンチャ」はパンチャ・ブータ〔五元素／微細元素〕、すなわち、シャブダ〔音〕、スパルシャ〔感触〕）、ルーパ〔形〕、ラサ〔味〕、ガンダ〔香り〕です。一つの目標のためにすべてのパンチャ・ブータを調べることが、プロジェクトです。
（小学生に）君はどのクラスで勉強しているのですか？

小学生：第7学年です、スワミ。
スワミ：第7学年の意味は何ですか？
（回答はなかった）
1＋1＋1....このようにして、7つの1が7を作ります。君はハリシュチャンドラの劇に出演しましたね？
小学生：はい、スワミ。

スワミ：君のクラスで一番は誰ですか？
（その小学生はある生徒を指差した）君が一番になったらどうですか？
（別の生徒がスワミのところにやってた）
君は何点取りましたか？
小学生：スワミ、僕は算数で100点を取りました。
スワミ：100点！ とても良いですね。

小学生：サンスクリット語でも100点を取りました、スワミ。
スワミ：サンスクリット語も100点！ 君はサンスクリット語を話せるのですか？
小学生：はい、スワミ。
スワミ：話してみなさい。

その少年は、サンスクリット語でラーマーヤナについて話しはじめました。しかし、不安から、しだいにたどたどしくなり、ついには泣き出してしまいました。すると、スワミは愛情深くその涙をぬぐい、優しく抱きしめて、慰めてくださいました。

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000 pp.241-242

帰依者体験談

Dr. Pradeep Kumar Badiya
（プラディープ・クマール・バディヤ博士）

スワミと私

私を不浄から浄性へと導いてください
私を闇から光へと導いてください
私を死から不死へと導いてください

オーム　シャンティ　シャンティ　シャンティヒ

スワミをどう思っていたか？

それまで私はスワミについて、何も知りませんでした。私は、スワミがかつて生きていたラーマ神やクリシュナのような存在だと思っていました。幸いなことに、私は2007年にプラシャーンティ・ニラヤムのシュリ・サティヤ・サイ大学（SSSIHL）の学士課程に入学しました。

当時は、シュリ・サティヤ・サイ大学に幾つかの異なるキャンパスがあることも知りませんでした。入学試験の間も、スワミにお目にかかることはありませんでした。というのも、その年、スワミはブリンダーヴァンにおられたからです。

私にとって、初めてのスワミのダルシャンは、（木曜日に定期的に行われている）道徳の授業でした。肉体のスワミを見たのは、その時が初めてで、スワミはサイ・ギータについて話されました。

スワミのペットの象は、その年に亡くなりました。スワミは、サイ・ギータのことを語りながら、子供のように泣かれたので、私たち全員が涙を流してしまいました。私はスワミをこの目で見、スワミは生身の人間として実在していたのです。いつから私の思いや考えが鮮明になり信仰が培われたのか、自分でも正確にはわかりませんが、それ以来、スワミへの信仰は深まり続けています。

私はサイ大学の吹奏楽部に、学部の2年生（2008年）で入部し、スワミとの直接の交流は、それ以降です。私はバンドでクラリネットを吹いていて、行進の時は行列の最後列に立ちました。スワミは私のすぐ後ろにいらっしゃいました。私はスワミと同じテルグ語を母国語としています。

すべてのプログラム（招集、誕生日、賞品配布など）の後、私はスワミに話しかけました。スワミはいつも「チャラ・バグンディ」（とても良いね）と明るく言ってくださいました。

化学専攻

学部2年生の終わりには、スワミにお尋ねしてからコースを選ぶのがいつもの習慣でした。ある人はスワミに話しかけ、生物科学と化学のどちらを取るべきかを尋ねました。でも、私はスワミに意見を聞くのが怖かったのです。化学を取りたかったからです。スワミに尋ねると、生物科学を選ぶように言われるかもしれません。

あるバンドの演奏が終わった後、私たちはヤジュルマンディラムの前に立っていました。私はスワミの近くに行き、「スワミ、私は化学を学びたいのですが、どうか祝福してください」と伝えました。スワミは優雅に微笑まれ、私はそれをイエスと受け取りました。

シュリ・サティヤ・サイ大学で学士課程の後は続けられないと思っていましたが、スワミの恩寵で、化学専攻で修士号から博士号まですべての学問を終え、シュリ・サティヤ・サイ大学での勤務もしました。2007年から2022年までプラシャーンティ・ニラヤムに15年間いました。

85歳の誕生日を祝う

例年、11月22日は、バンドマンにとって最初の演奏となることが多かったのですが、2008年は、11月17日の「サハッスラ プールナ チャンドラ ダルシャナ（注1）」の最終日に、私はスワミの前で演奏する機会を得ました。

スワミは常にすべての人々を覚えていて、決して失望させることはありません。私の最高の瞬間の一つをお話ししたいと思います。私たちバンドマンは、スワミの誕生日を祝うことを誇りにしており、スワミの誕生日を早くにお祝いする数少ない人間です。

2010年、スワミの85回目の誕生日のことでした。カレンダーは、世界中の帰依者のプログラムで埋め尽くされていました。どのバンド（少年、少女、小学校）でも、主催者が時間を調整するのが大変でした。祝賀会はヒルビュースタジアムで行われていました。午前中、私たちは行列に参加しました。

スワミは黄金の馬車でやって来られました。私たちは「ハッピーバースデー」を演奏し、スワミの誕生を祝いました。

シャーンティ・ヴェーディカー（スタジアムの演壇、スワミやVIPの観覧席）に向かう間、私たちは「ハッピーバースデー」を演奏し、スワミに挨拶をしましたが、周囲には大音量の音楽が流れ、多くの帰依者たちがいて、私たちの願いはスワミに届かなかったに違いないと思っていました。夕方、バンドボーイたちは皆、クルワントホールでスワミを待っていました。

もしチャンスがあれば、せめて一回はスワミに「ハッピーバースデー」を伝えることができるかもしれないと思っていました。さまざまなグループの帰依者たちも、ケーキを持ってスワミを待っていました。

その晩、私たちは「バースデーソング」を8回演奏することができました。スワミはあちこちを回って、すべての帰依者を祝福されていました。そして、私たちバンドボーイのところに来て、全員を祝福してくださり、微笑みながら「シャーンティ・ヴェーディカーで帰依者が待っているから、私は行く」と仰いました。

その日、私たちは合計で9回スワミにバースデーソングを捧げました。私たちは皆、それぞれがとても幸せで至福の時を過ごしました。私はあの日、あのスワミとの個人的な時間を永遠に大切にしたいと思います。

バンドの練習中、バンドボーイはいつもこの2つの祈りを唱えます。

サマスター・ローカー・スキノー・バヴァントゥ
すべての世界が幸せでありますように

SAI RAM

プラディープ・クマール・バディヤ博士：

シュリ・サティヤ・サイ大学　プラシャーンティ ニラヤム校卒業。2007年シュリ・サティヤ・サイ大学の学士課程に入学し、2012年に修士課程、2014年に化学の修士課程修了。2017年シュリ・サティヤ・サイ大学でBSRフェローシップ（UGC-India）のもと、プラズモニクス、バイオプロセス、分析化学の分野で博士号取得。2017年から2022年までシュリ・サティヤ・サイ大学で研究員として勤務し、その後来日。15年間プッタパルティで過ごし、スワミと多くの交流があった。現在、北陸先端科学技術大学院大学の博士研究員。

シュリ・サティヤ・サイ大学博士号授与式

金沢グループにおいても、ナーラーヤナセヴァやバジャンのリード等で活躍中。

名古屋でのナーラーヤナセヴァ

※注1：サハッスラ プールナ チャンドラ ダルシャナ：人類の幸福と世界平和のために行われた神聖なプログラム。2008年11月15日（土曜日）の朝に始まり、2008年11月17日（月曜日）にプールナーフティ（注2）で最高潮に達した。インドのさまざまな地域から到着した何百人ものヴェーダ学者によって実施された。神の化身の1000の満月の日の完了のお祝いは、ユニークで縁起が良く、神の化身の祝福を受けることによって、自分たちの生活を聖化する類いまれな機会。

※注2：プールナーフティー：犠牲の火への最後の奉納

https://www.sathyasai.or.jp/mikotoba/discourses/d_19621007.html

プラシャーンティ ニラヤム便り

ナレンドラ・モディ首相による サイ・ヒラ・グローバル・コンベンション・センター 落成式

2023年7月4日

バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババ様の神聖な恩寵により、アブドゥル・ナゼール現アーンドラ・プラデーシュ州知事を主賓として、サイ・ヒラ・グローバル・コンベンション・センターの落成式が執り行われ、ビデオ会議システムを通じてリモート出席されたインド国のナレンドラ・モディ首相によって社会に奉納されました。

盛大な式典に集まった満員の聴衆たちが、1000人収容の大講堂に設置された大型スクリーンやアシュラム内のさまざまな場所に設けられたスクリーンを見つめていると、目の覚めるような装いのナレンドラ・モディ首相が大型スクリーンに現れました。

最初に、サティヤ・サイ大学の学生たちが式の始まりを告げる短い詠唱を行いました。続いてシュリ・サティヤ・サイ・セントラル・トラスト（ＳＳＳＣＴ）のラトナーカル代表理事から挨拶があり、首相は熱心に耳を傾けました。

ラトナーカル氏はモディ首相にサイラムと挨拶してから、国内におけるモディ首相の精力的な取り組みに感謝の意を表しました。そして「首相は国と国民を第一に考えておられているため、最近アメリカとエジプトを訪問された際にも決して疲れた様子をお見せになりませんでした」と賞賛しました。

「このような献身と勤勉は、すべての国民が見習うべき模範です」とラトナーカル氏は述べました。そして、モディ首相が自身の母であるヒーラ・ベンジー夫人を深く愛し、母からの祝福を受けるため、いつも母の家を訪れていたことを紹介しました。ラトナーカル氏は「モディ首相は、この国のすべての子供、すべての息子、すべての青年の模範であり、『マートゥル・デーヴォー・バヴァ』（母を神とし

て敬いなさい）の教えに従っておられます。スワミもまた、頻繁に母イーシュワランマのサマーディ（墓所）を訪れて神なる母に敬意を表し、『まず自分の母を敬い愛する』模範を示されました」と述べました。

ラトナーカル氏は言いました。「シュリ・サティヤ・サイ・ババ様はインドが独立する以前から、非常に慎ましいやり方で神聖な使命を始められました。しかし現在、ババ様のメッセージは世界中に届いています。」

ラトナーカル氏は、スワミがどれほど「点数ではなく教師所見」を重視されていたかを語りました。人格形成は、バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババ様の御教えの中核であり続けています。ラトナーカル氏は、スワミが貧困、特に農村部の人々のための医療施設の欠如、質の高い教育へのアクセスに、どれほど思いを寄せられていたかを伝えました。

比良氏への感謝

ラトナーカル氏は、サティヤ・サイ・ミッションにおける比良氏の長年の貢献と、サイ・ヒラ・グローバル・コンベンション・センターの建設への貢献について、特別に謝意を表しました。それから、現在プッタパルティに滞在している５０カ国から集まった３千人以上の代表団がシュリ・サティヤ・サイ・グローバル評議会（ＳＳＳＧＣ）のセンターリーダー大会に出席していることにも言及しました。

すべての帰依者がこの施設を利用できるようにすることを表明しているＳＳＳＣＴは、この素晴らしい現代的建築物の計画と建設に着手し、それは今や現実のものとなりました。

ラトナーカル氏は、５分間の挨拶を終える前に、ＳＳＳＣＴと世界中の何百万人もの帰依者を代表して、インドのナレンドラ・モディ首相をシュリ・サティヤ・サイ・ババ様のジャンマ・ブーミ（生誕地）であるプッタパルティに招待しました。

私は近いうちにプッタパルティを訪問します

モディ首相は、両手を合わせて「サイラム」と挨拶してから、スピーチを始めました。首相は「自分は何度かプッタパルティを訪問する幸運に恵まれ、（首相になってからも）直接行くことを強く望んでいましたが、多忙のため来ることができないでいました」と語りました。

「弟（バイ）ラトナーカルが、私をプッタパルティに招待してくれました」と首相が言うと、大きな拍手が沸き起こりました。モディ首相は「私は、バガヴァン・ババ様の祝福を求めてプッタパルティに行くことを切望しています」と語り、このような素晴らしい一日を過ごせたことを、すべての帰依者に感謝しました。彼は言いました。「すべてはスワミの祝福です。」

ＳＳＳＧＣリーダー大会のテーマは素晴らしい

首相はスピーチの中で「シュリ・サティヤ・サイの祝福と啓示は、今日、私たちと共にあります」と述べ、式典に集まった人々全員を祝しました。モディ首相は「今日、スワミの使命は拡大を続けています。私は、サイ・ヒラ・グローバル・コンベンション・

センターという名の新しい世界規模のコンベンション・センター（大会議場）がこの国にできたことを喜んでいます」と語りました。首相は「この新しいセンターが霊性と現代性の素晴らしさを体験させてくれるでしょう」と自信を示しました。

そして「このセンターは文化的多様性と概念的壮大さを備えており、世界中から学者や専門家が集まって、霊性や学術的プログラムに関する議論が行われる中心地となるでしょう」と述べました。

それから「どのような考えも、それが行動という形で前進するときに最も効果があります」と述べました。また、本日、サイ・ヒラ・グローバル・コンベンション・センターの落成式とは別に、ＳＳＳＧＣのセンターリーダー大会が開催されたことにも言及しました。大会のテーマである「実践し、ひらめきを与えなさい」を首相は称賛し、印象的であると同時に今の世の中にふさわしいものであると述べました。モディ首相は、社会のリーダーたちがよい振る舞いをすることの重要性を強調しました。なぜなら、社会が彼らに従うからです。そして「シュリ・サティヤ・サイの生涯がそのお手本です」と語りました。

「今日のインドもまた、己の義務を優先しながら動いています。独立の世紀に向けて動きながら、私たちは、アムリタ・カーラ（不滅の時代＝黄金時代）をカルタヴィヤ・カーラ（義務の時代）と命名しました。これらの誓いには、私たちの霊的価値という指針と、未来への決意が含まれています。それにはヴィカス（発展）とヴィラサト（遺産）の両方があるのです。」

ラトナーカル氏がシュリ・サティヤ・サイ特別区をデジタル特別区にする

次に、モディ首相から、非公式かつサプライズな要請がありました。首相は「世界中のデジタル取引の４０％がインドで行われています」と話しました。

それから直接ラトナーカル氏に「私は、スワミの御名を冠した特別区が設立されることを嬉しく思っています。この特別区を完全にデジタル化することができますか？」と尋ねました。そして「バガヴァンの恩寵とラトナーカル氏のような友人があれば、この挑戦を引き受けて、ババ様の次の御降誕祭までに完全にデジタル化することができるでしょう」と語りました。そして「SSSGCは世界とインドの『架け橋』となる素晴らしいものです」と述べました。

サティヤ・サイの使命は
ＳＳＳＧＣを介して至る所に広まっている

首相はＳＳＳＧＣの設立についても特別に言及しました。「この国で目撃された変革は、あらゆる社会階層が貢献した結果です」と述べ、ＳＳＳＧＣのような組織は、インドについてより深く知り、世界とつながるためには効果的な媒体であると強調しました。古代の聖典に言及しながら、首相は「聖者は流れる水のようだと考えられています。なぜなら彼らは決して思考を止めることがなく、己の振る舞いに飽きることがないからです」と語りました。

モディ首相は「聖者の人生には、途切れることのない流れと努力という特徴があります」と指摘しました。そして、「聖者の生誕地がその信奉者を決めるわけではありません」と言及しました。「帰依者にとっては、真の聖者であるならどの聖者も自分たちの聖者であり、自分たちの信仰や文化を代表する存在となるのです。」「すべての聖者はインドで何千年もの間『エーク・バーラト・シュレーシタ・バーラト』の精神を育んできました」と首相は述べました。

（訳注：「エーク・バーラト・シュレーシタ・バーラト」とは「一つのバーラタ、最高のバーラタ」という意味で、他州の文化、伝統、慣習への理解を進めることによって、インド国内の一体性を高める政策。2015年10月31日にモディ首相が発表。）

シュリ・サティヤ・サイ・ババ様はプッタパルティ生まれですが、その信奉者は世界中にいます。ババ様の施設やアシュラムはインドのすべての州にあり、誰でも入ることができます。首相は言いました。「言語や文化に関係なく、すべての帰依者がプラシャーンティ・ニラヤムにつながっています。インドという国を一本の糸で織りあげ、不滅にしているのは、その願いなのです」

サティヤ・サイ・ババ様の
シンプルで深淵な御言葉が大好き

首相は奉仕の力に関するサティヤ・サイの御言葉を引用し、テルグ語でもセヴァに関する御言葉を披露して、聴衆を喜ばせました。スワミと交流し、サティヤ・サイの祝福という庇護の中で生活する機会に恵まれた思い出を、感謝を込めて語りました。シュリ・サティヤ・サイは深淵なメッセージをシンプルに伝えていましたと、思い出話をしました。

首相は『すべてを愛し、すべてに奉仕しなさい』、『常に助け、決して傷つけてはならない』、『おしゃべりを減らして、仕事を増やしなさい』、『すべての経験は教訓です。すべての損失は利益です』といった不朽の御教えを列挙しました。「これらの御教えには思いやりがあり、人生に対する深い哲学があります」と首相は語り、2001年のグジャラート地震でのスワミの御導きと支援の思い出にも触れました。モディ首相は、シュリ・サティヤ・サイの深く慈愛に満ちた祝福を思い起こしながら「私にとって人類への奉仕は神への奉仕でした」と振り返りました。

インドのような国における社会福祉の中心は、常に宗教団体や霊性団体であったことを、首相は指摘しました。そして「アムリタ・カーラ（不滅の時代）決議によって発展と遺産に勢いを与えようとしている今日、その中で大きな役割を担っているのはSSSCTのような団体です」と述べました。

バル・ヴィカスは現代世代にとって
素晴らしい取り組み

SSSCTの霊性部が、バル・ヴィカスのようなプログラムを通じて、新しい世代の中に文化的なインドを創造していることに、首相は喜びを表明しました。また、国家建設と社会のエンパワーメントにおけるSSSCTの努力を強調しつつ、プラシャーンティ・ニラヤムにある高度病院や、無償教育のために何年にもわたって運営されている学校や大学や、献身的に活動しているサティヤ・サイに関連した諸団体についても触れました。そして、SSSCTは遠隔地の村落に無償で清潔な水を提供しているため、国の「ジャル・ジーヴァン・ミッション」に基づいてすべての村に清潔な水を提供することを目指す人道的活動のパートナーとなっていることも強調しました。

（訳注：「ジャル・ジーヴァン・ミッション」―ジャルは水、ジーヴァンは命を意味する。2024年までにインド農村部の全世帯に、各家庭の蛇口から安全で十分な飲料水を供給することを目的にした国家プロジェクトで、持続可能な水の使用に関する教育プログラムなども含まれている。）

プレーマ・タル植樹プロジェクトに言及

首相は、バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババ様のご生誕100周年記念に向けて今後2年間で1千万本

の木を植える取り組み、プレーマ・タル（プレーマは愛、タルは木の意味）の意義を強調しました。そして全ての人に、植樹であれ、インド決議のプラスチック・フリー運動であれ、このような取り組みの支援に手を挙げてくださいと呼びかけました。また、太陽エネルギーやクリーンエネルギーも選択肢に入れてくださいと皆に要望しました。

ここでモディ首相は、グローバル・コンベンション・センターのスポンサーである比良氏に言及しました。比良氏は頻繁に会う長年の友人であり、何かを依頼すると、彼は親切に友人としてその仕事をやってくれると語りました。そして全ての人に対して、日本で見られるような、生態系の助けとなる「小さい森」というコンセプトを導入して欲しいと呼びかけました。

首相は、アーンドラ・プラデーシュ州が運営する学校で学ぶ約400万人の生徒にラギ・ジャワ（シコクビエの麦芽）から作られた食糧を提供するというSSSCTの取り組みを称賛しました。首相は、雑穀の健康上の利点を強調し、他の州でもこのような取り組みが行わるようになれば、国は大きな恩恵を受けるだろうと述べました。

そして「ラギ・ジャワ・プロジェクトには健康があり、可能性もあります。私たちの努力はすべて、世界レベルでインドの可能性を高め、インドのアイデンティティを強化するものです」と付け加えました。

プッタパルティにはよい思い出がある

最後にモディ首相は、先のラトナーカル氏の招きに応えて、シュリ・サティヤ・サイ・ババ様との素晴らしい思い出を懐かしく思い起こし、プッタパルティに来ることをどれほど切望しているかを語りました。そして、自分がプッタパルティを訪問したのは随分前のことであり、再びプッタパルティを訪れて、以前にプラシャーンティ・ニラヤムに滞在した時の神聖な瞬間を思い起こしたいという言葉でスピーチを締めくくりました。モディ首相の力強くパワー溢れる献身的な話に耳を傾けた観客全員が、立ち上がってスタンディングオベーションを行いました。

ＳＳＳＧＣの新しい本部施設

この施設を利用するのは、主にSSSGCが中心となり、1年間に少なくとも90のプログラムを実施する予定です。

サイ・ヒラ・グローバル・コンベンション・センターの主な特徴は次の通りです。

何よりも特筆すべきは、座席数1000人の講堂の天井にある巨大なサルヴァダルマのロゴです。誰がこれを提案したのかはわかりませんが、この講堂に足を踏み入れた人は誰でも一瞬、開いた口が塞がらなくなるでしょう。

- コンベンション・センターの建物の建築面積は約5,240平方メートル
- 2つの講堂(1000席と300席)
- コンサート、オーケストラ、クラシック音楽プログラムなどのプレゼンテーション用に使える2つの大型ステージ(27.5m x 15mと27.5m x 9m)
- 人間工学に基づいた観客席
- 各50人収容可能の中型会議室2室（合わせて100人収容可能）
- 建物全体のセントラル空調システム
- 最新オーディオシステム
- LEDスクリーン
- プログラムで使用できる非常に美しい照明と高性能ライトグリッド（格子状に組まれた照明器具）
- UPS、発電機、インバーターによる電源バックアップ
- 環境に優しい屋上の太陽光発電
- シュリ・サティヤ・サイ・アーカイブスの建物とサイ大学管理棟を背景にした癒しの池
- 人々のスムーズな移動を助ける広々としたロビーと廊下
- 強固な防火システムと24時間監視体制
- 庭のある美しい景観
- スワミの愛とメッセージが描かれたモチーフ

ＳＳＳＧＣ各ゾーンごとのオフィス

上記とは別に、グローバル・コンベンション・センターには、各ゾーンごとのオフィスと、SSSGCのミーティング全てに使用できる会議室もあります。美しい緑と白の大理石は視覚的にも美しく、レセプションエリアには、インドと世界地図の美しいLED装飾が設置されています。

私たちはスワミに祈ります。SSSCTのこの崇高な意図を祝福してくださいますように。そしてすべての兄弟姉妹が会議、ミーティング、セミナー、その他あらゆるプログラムを実施し、参加することに加わり、スワミからのこの贈り物を最大限に活用できますように。

ジェイ・サイ・ラム

R. サティシュ・ナイク
於プッタパルティ

＜活動報告＞

スタディー サークル

開催日：２０２２年１月16日（日）
テーマ：「マカラ・サンクラーンティ※１」
参加者：37名

質問：
① エデュケア※２を追求するとはどのようなことか？
② 内なる声、良心からの声を明確に識別するにはどうすれば良いか？

＜参加者のコメント＞

… ① エデュケアを追求するとはどのようなことか？

「エデュケアは内なる良心の声に従うこと。その声が聴こえるように努力することだと思う。」

「エデュケーション（教育）と比較してみれば分かりやすい。エデュケーションは本の知識、外面的な知識に関わること。一方でエデュケアは内側にある霊性の知識。つまり内なる本質から湧き出すものだと思う。」

… ② 内なる声、良心からの声を明確に識別するにはどうすれば良いか？

「スワミ※３と出会った頃は、自分はの中で内なる良心の声なのか、エゴの声なのか分からないことが多々あった。その頃と比べて、段々と分かるようになってきたと思う。同じように『黄金の宇宙卵』を何年か経って再び読むと、こういうことなのかと非常に感動したことがあった。霊性修行を積重ねることによって、自分の内側は成長して、識別心というものも少しずつ得られると思う。」

「マインドが活発になると良心の声が分からなくなってしまう。マインドを静めるためには、真実の知識、すなわち、すべては一つで、生まれる前から私たちは愛で、ずっと愛によって支えられているという知識が必要。」

「人は内なる声が良心なのかエゴなのかを聞き分ける直感的な力があるという気がしている。例えば、自分のエゴの声であれば何かしら引っかかりがあるが、良心の声の場合は、その引っかかりがなく、ストンと入ってくる。理屈ではなく、直感的に分かるようになっている気がする。」

＜サイの学生のコメント＞

… ① エデュケアを追求するとはどのようなことか？

「エデュケアの意味は内なる声に従うこと。エデュケーションは単に書物の知識だが、否定するのではなく、むしろエデュケーションとエデュケアの両方とも必要だと思う。エデュケーションによって教育を受け、そこで得た知識を使い,学位などの証明書が成果として得られる。しかしエデュケアは人生そのものの目的と関係している。私たちが日々体験するすべてが、自分の思い、言葉、行動に基づいた反射・反映・反響であるという真理に従うならば、自分の体験に関しては他者には責任がないことになる。だから日々の行動を私たちは純粋なハートで行わなければならない。そしていつも心に留めておかなくてはならないのは常に助け、決して傷つけないということだと思う。」

「スワミが教えてくださっている５つのヒューマンバリューズ(人間的価値)がある。真理・正義・平安・愛・非暴力。これらがヒューマンバリューズと呼ばれる理由は、これらの特質がとりわけ人間においてみられるからだ。だから人間は、人間的価値を示している必要がある。エデュケアを追求することは私たちの内側にある価値を顕現すること。それを顕すためには訓練が必要。そして私たちの人生においてそれらを顕現していく必要がある。それがエデュケアを追求するという意味ではないかと思う。」

… ② 内なる声、良心からの声を明確に識別するにはどうすれば良いか？

「この世のすべての生きとし生けるものは、それぞれに内なる声をもっていると思う。そしてその声を聞くためには、安定した心が必要だと思う。スワミがおっしゃっているのは、私たちが行うすべてに、反射・反映・反響があるということだ。その反射・反映・反響により、様々な思いが再び生じる中で、本当の内なる声を見つけることは結構難しい。内なる声の中には良いもの悪いものもあり、その中で正しいものを選択できたとき、内なる声を正しく聴けたことになるだろうと思う。しかし内なる声を聞くことは本当は簡単で、安定した心の状態で神にフォーカスしていればできることだと思う。」

「内なる声の特質には２通りある。一つは人間的特質ともう一つは動物的特質だ。動物的特質からは動物の声が聞こえてくる。私たち人間は、人間的特質からの声を聞くことを目的にすべきで動物的性質と区別できるようになる必要がある。人間的特質とは、決して誰も傷つけないことや、きつい言葉を使わないことや、そして五大価値としての真理、正義、平安、愛、非暴力などに現わされるものだ。人間的特質からの声を受け取った時に、それを自分の行動の中に反映していくことができる。そして、そのような行いをした後には平安がある。すべての人は平安を求めている。そのようにして私たちの内側の声から良いものを拾い上げることができる。」

「スワミもよくおっしゃっているように、あらゆる怒りから来る行為は、私たち自身にとって非常に良くない。その一方で正義というものから来るあらゆる行為は非常に良い。それが良いものであるか悪いものであるかは、その声を得た時の私たちの心の状態に拠っている。学生時代に瞑想の授業を受けた時のこと。その時の先生がスワミから瞑想の間にどのようにしているべきかを教わってきた。その先生に学生たちが、今日の質問２と同じような質問をした。『内なる声が聞こえた時に、自分の心の中に怒りや憎しみがあれば、それは間違いなく良心の声ではない。いかなる人間の基本的な属性は人間的五大価値だ』というお話だった。私たちが内側から得るいかなる声も、この五つの人間的価値に基づいた声であるべきだということ。内側から聞こえてくる声に愛があるか、

あるいは正義や非暴力があるかどうか、それが判断軸となる。そしてまた、神の声というものは、静寂の深みの中においてのみ聞こえてくるものだと言われている。そして静寂とは、外側の静寂と内側の静寂の両方を意味している。良心の声を聴こうとするときには、いつでも外側と内側の静寂を確保しておくことが大事になると思う。」

＜ババ様の御言葉＞

オームのアカーラ（A）とウカーラ（U）とマカーラ（M）は、「オーム タット サット」の原理、すなわち、「タットは真理」、「私は真理」、「真理は一つ」という原理を象徴しています。オームは常に存在している内なる声であり、ハートの空洞からの神の呼び声のこだまです。それに耳を傾け、それに感動しなさい。そうすることは内なる礼拝です。さまざまな礼拝のうち、外でのプージャー（儀式礼拝）は外的な象徴です。エゴが猛威を振るってはびこっているとき、どうやって心が落ち着くこと、信仰が定まることができますか？ 目覚めている時、夢を見ている薄明かりの時、そして、夜に熟睡している時を通じて、ずっと光り輝いている、内なる炎の象徴、オームを黙想しなさい。こうすることによって、豊富に恩寵を得ることができます。

１９７０年１１月２２日

※１マカラ・サンクラーンティ：太陽暦の元旦。単にサンクラーンティともいう。インドの冬至。日本をはじめとする多くの国々の冬至が日の出から日の入りまでの時間が一年で一番短い日を指すのに対して、インドの冬至は日の出の時間が一年で一番遅い日を指す。太陽がマカラ（磨羯宮）にサンクラーンティ（移転）し、黄道上で南から北に移る日としてインド各地で祝われる。南インドのタミルナードゥ州、アーンドラ・プラデーシュ州ではポ
ンガルという名の収穫祭として祝う。

※２エデュケア：ババの教育法。語源は「引き出す」という意味をもつラテン語のエデュカーレ。

※３スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

開催日：２０２２年１月19日（水）
テーマ：プレーマヴァーヒニー第１４節、６２節「真理として、愛として、神を瞑想しなさい」、「神の御名を息吹と見なしなさい」
参加者：51名

質問：
① プラフラーダ※１やドゥルヴァ※２は神の御名を繰り返し唱えるだけで神を見て、神に触れ、神と会話することができたが、なぜ神の御名を唱えることはこれらのすべてを可能にするのか？
② 神の帰依者の仲間と共にいることは、どのように私たちに識別や放棄をもたらすのか？
③「あなたが与えられたすべての強さと才能を用いて、誠実に話し、行動しなさい」という御言葉を通してスワミ※３が何を求めているか？

＜参加者のコメント＞
… ① プラフラーダ※１やドゥルヴァ※２は神の御名を繰り返し唱えるだけで神を見て、神に触れ、神と会話することができたが、なぜ神の御名を唱えることはこれらのすべてを可能にするのか？

「神の御名を繰り返すことの良さは、前にSis. Aがガーヤトリーマントラ※４のセッションで話してくれた。正しく唱えるとブラフマプラカーシャ※５が降りてきて、この世のものとは全然違うバ

イブレーションで守り、正しい道を照らしてくれる。健康にも良いことが実体験として分かる。２０００年にダルシャン※６会場にババ様が一時間たっても出て来られず、みんなで待っていたが、これはもう来てくださらないという雰囲気になった。その時にガーヤトリーマントラを一時間以上唱え続けて、喉もカラカラになってしまった。ダルシャン会場の後方だったにもかかわらずスワミが来てくださって、目の前に止まって、ものすごく爽やかな笑顔で見てくださった時に、やはりガーヤトリーマントラと神の御名をババ様は聞いてくださっていたと実体験した。それ以来ガーヤトリーマントラや神の御名はいかにババと繋がっていて、ババが喜んでくださるのか体験として分かった。」

「私もインドに行った時にババの御名を唱えて、ナーマスマラナ（神の御名の憶持）をしていて、神の御名の力を実感したことがある。清らかな心で唱えなかったときにババ様が目の前にいらっしゃってきつく叱られたので、清らかな心で唱えることが大事だと思った。」

… ② 神の帰依者の仲間と共にいることは、どのように私たちに識別や放棄をもたらすのか？

「本来、霊性修行は一人で行うもだが、オーガニゼーションでは仲間がいて霊性修行がさらに進んでいくだろうと思う。“My life is my message, Our life is my message”という言葉もあるが、良き仲間の生き方、神のメッセージを生きている姿を通して、肯定的な影響が与えられる。自己を放棄したり、あるいは真実と非真実とを区別して、揺るぎないものに立脚して生きている姿を見ることができる。そのこと自体がやはり一人ではできない。一人ではできないことを、良き仲間がいることで達成でき、仲間の姿から勇気を与えられたり、識別、放棄などの価値を共有して、一緒に進んでいくことができるのではないかと感じた。」

「あなたの仲間がどういう人々であるのかによって、あなた自身がどういう人であるのかが分かるというスワミの御言葉があったと思う。悪い仲間の中に自分がいると悪く染められてしまう。周りの環境に自分が染められていってしまう影響はとても大きいと思う。一方、サットサング（善い仲間）と共にいることは、最高の仲間と神に向かって行くことになる。私もスワミを知って２０年ぐらいになるが、とても一人では、多分続けてこられなかった。サットサングの中にいるからこそ続けられた。常に周りから良い情報を与えられ、自分自身が成長していける点があると思う。」

… ③ 「あなたが与えられたすべての強さと才能を用いて、誠実に話し、行動しなさい」という御言葉を通してスワミ※３が何を求めているか？

「私たち一人ひとりすべてが、神から強さと才能を与えられている。そしてすべての人の中に神様がちゃんといらっしゃって導いているので、自信と勇気をもって誠実に話し、生きていきなさいと言われているような気がする。」

「この言葉どおりで、真心というか真理に生きなさいということだと思う。誠実に話し、というところでは耳が痛い。私は悪い癖で、本当に誠実に毎回話しているかというと怪しい部分があると、この御言葉を見て反省していた。もっと真心を込めて話すようにしたいと思う。２番の質問について、２０００年ごろスワミのダルシャンによく行っていた。そんなある時『皆から離れて一人でダルシャンの列に並んだ方が、スワミの近くにいけるのではないか』という思いが浮かび、日本人グループと離れて一人で並んでみた。するとダルシャン会場のすごく後ろになってしまって、日本人グループがダルシャン会場の前の方でスワミの祝福を受けている姿を私は一人で後ろから見ていたことがあった。その後スワミの御言葉おみくじを引いたら、『あなたはサイ・オーガニゼーションにいるからこそ、スワミの近くに来られるので

す』という御言葉だった。それ以来、私はやはりサイ・オーガニゼーションにいることによってスワミの近くに行けるのだと本当に思うようになり、それ以来一人で並ぶことはなくなった。」

＜サイの学生のコメント＞

… ① プラフラーダ※１やドゥルヴァ※２は神の御名を繰り返し唱えるだけで神を見て、神に触れ、神と会話することができたが、なぜ神の御名を唱えることはこれらのすべてを可能にするのか？

「神の御名を繰り返し唱えることは、自分にとって一種のリラクゼーションのようなもの。歩いている時にもバジャン（神への讃歌）を歌ことなどが、自分に非常に多くのリラクゼーションを与えてくれている。アナンタプル※７でも多くの学生さんは時間があればノートにオーム サイ ラム※８とたくさん書き連ねたりして。時間があるとサーダナ（霊性修行）をしていた。自分がいたサミティ（サイセンター）のある年配の帰依者がリキタ　ジャパム※９・ブックにオーム　サイ　ラムの文字をずっと書いていらっしゃった。その方は大変忙しい時でも常に、体調が悪い時でも、変わらずオーム　サイ　ラムをずっと書き続けていた。ある時、あまりにも具合が悪くて書くこともできず、そのまま眠りに落ちてしまった。でも、朝に目覚めるとそこに置いてあったノート全部に御名が書いてあった。その人は一人で住んでいて、どなたもそこに来ることができなかったのに、ノートにはそのように書かれていた。バガヴァン（尊神）だけがそのようなことをおできになるとその方は思った。神の御名をリキタ　ジャパム・ブックに書くだけでなく瞑想の中でも唱えるとか、どのようなやり方でも神の御名を覚えておくことが重要だと思う。今日の節では、プラフラーダが御名を唱えることだけによって神を見ること、神に触れること、神と対話すること、それらのすべてを得ることができたと書かれている。もう一つの章ではサットサングがどのようにして私たちに識別力や放棄を促すかが書かれている。本当にスタディーサークルもサットサングの一例だと思う。このスタディーサークルが始まってから御教えの理解において非常に多くの進歩があり、意義深いものになっていると思う。同時に、今回の節の別の場所には、いつも誠実に真実を語るとか、私たちのすべての才能をかけて真実を語ることを実践しなさいと書かれている。バガヴァンがそのようにおっしゃる理由は、もし私たちがいつも真実に基づいて誠実であれば、いついかなる状況においても私たちは罪悪感を感じながら生きなければならないことはないだろうということ。罪悪感なしに生きていくことができるのであれば、私たちはいつもありのままの自分自身を受け入れていくことができると思う。今日はぜひそのような点をこれらの章について話し合って、理解を深めることを楽しんでいきたい。」

「日々御名を唱えることだけではなく、神様へ捧げる様々な仕事をとおしてこれらのすべてのことが得られるのではないかと思っている。そして自分の口で唱えることだけに限らずに、いつもバジャンやヴェーダ※１０を聞いているとか、耳をとおしてもこういった体験が得られるのではないかと思う。最初は朝早く起きることに自分も怠惰な時があった。でも、ある段階で朝早く起きてバジャンをするようになり、聞こえてくる神の御名が自分のモチベーションを高めてくれるようになった。朝早くからバジャンをかけることから始めるようになり、その日をアクティブに過ごすことを助けてくれるようになった。今はスワミの身体が遍在の状況でいらっしゃるので、文字通りに神に触れ神と会話をすることが今はできないが、様々な体験を可能にしてくれるだろうと思う。」

「聖典に書いてあることは、カリの時代※１１では神の御名を唱えることが解脱をもたらすということ。個人的には神の御名を唱えることによって本当に幸せになる。神の御名を唱えている時は、その神の御姿を思い浮かべたりする。自分が誠実に神の御名を唱えている時は、その神と共にいる

ように感じる。ミーラー・バーイー※１２もクリシュナ※１３の御名をいつも唱えていたが、ハートにクリシュナの御姿を浮かべながら唱え、唱える度にミーラー・バーイーのハートの中でクリシュナのイメージが刻み付けられていた。それはダルシャンだったのではないかと思う。そのようなやり方で神の御名を唱えることができれば、ハートにイメージが植えつけられて神と繋がることができる。神の御名を唱えれば私たちのエゴが最小化すると思う。神の御名を唱えながら何かを行うのであれば、その行為の結果を求めなくなると思う。マインドは神の御名を唱えることに忙しくなるので、その間はマインドが外の世界をうろつき歩くことがなくなる。そして心が内側を見るように訓練することができるようになると思う。神の御名を唱えることによって行為の結果を求めることがなくなれば、ダルシャンに繋がり、それがカルマ（行為の結果）を取り除いてくれる。最後の神との会話に至るという点に関しては、御名で心を清めることができるとそれによって神と会話することができるようになると思う。例えば、歩いていていろんなゴミが落ちているのを見ては、ハートの中のスワミがゴミを拾ってゴミ箱に入れなさいとおっしゃっていると思ってそのように振る舞うことができると思う。神の御名を唱えていくことは、神を達成することであったり、神の祝福を受ける資格を与えてくれるということだと思う。」

「本当に人間が進歩することの一番のカギになるのは、いかにして適応するかということだと思う。肉体的にも、精神的にもいろんな状況に対して適応しなければならない。もう一つ人間がもっている特質は、いろいろと物事を比べてしまうこと。よく私たちは自分のことを、自分に近しい他の人たちと比べて、自分の立ち位置がどのようになっているのかを見ようとしたりする。例えばプラシャーンティ・ニラヤム※１４で学生がダルシャンに行く時にはいつでも、可能な限りスワミの近くに行き、一列目に座りたいと考え、他の学生たちと競争して、マンディール（礼拝堂）に一歩でも早く着こうとする。そして何かの理由でスワミからすごく遠い所に座らなければならないと、ちょっと気分を害したりする。そうすることによって、少しでもスワミの注目を引いたりしたいと思う。実はラーヴァナ※１５の時代においてさえも、ランカー※１６に住んでいる人々は少しでもラーヴァナの近くに行って、ラーヴァナの気を引こうとしていた。プラシャーンティ・ニラヤムに住んでいる人々は、あくまでもスワミの注目を引きたいと思っていることが唯一の違い。そして、そこにはグループとしての活動というものがあることによって、人々が様々なバジャン、ヴェーダやいろいろなグループとしてのアクティビティに従事することができるようになっている。同じように当時ランカーにいた人々もグループで様々な活動に従事することによって、それを通してラーヴァナの気を引こうとしていた。どういう人々と共にいるのかということが、ラーヴァナの場合でさえも非常に重要だった。私たちの場合にはスワミの帰依者の仲間ということになる。スワミの帰依者としての活動の中で、識別や放棄を培っていこうと思うのであれば、そういったことは自然にやってくるだろうと思う。」

「サットサング（善人との親交）とは、神を愛する人々と近しくいること。本当に神を愛する人々が近しく集まって、いろいろなことを話したり、議論したりすると、本当にすべての話題が神の周りのことになる。どういう議論をしても、幾分かの神の話題が伴う。サットサングの中にいることによって、さらに私たちは神のことを聴いたり話したりするようになり、他の人がそうしているところを見ることになる。そして自分自身のいろいろな行動を他の神を愛する人々の行動と比べるようになって、それを通して識別もできるようになっていく。そして、神に近づきたいと思っている人々にとっては、そのようなサットサングに加わることは、自分自身が変容するための大変良いチャンスとなる。そして今日のこの質問への答えは、アーディ・シャンカラ（初代シャンカラ）

のバジャゴーヴィンダム※１７の詩の中にもあると思う。２番目の質問だけではなく、１番目の質問に関しても、バジャ　ゴーヴィンダムの歌詞の中にほとんどの答えが書いてある。良い仲間の中にいることによって、無執着が得られ、無執着があることによって、マーヤーという幻影から自由になることができると歌詞が続く。マーヤーから自由になることによって、それが一点集中と堅忍不抜につながる。それらがやって来るのなら、解脱がやって来るという順番になる。一度、今説明したような一つひとつの点が、どのように互いに繋がっているのかを理解することが大事だと思う。」

…③「あなたが与えられたすべての強さと才能を用いて、誠実に話し、行動しなさい」という御言葉を通してスワミ※３が何を求めているか？

「自分自身に対して真実であるということをスワミは強調されたいのだと思った。誰もが知っているように、真実を話すことは勇気が必要なこともある。そのようなときにも自分に正直であるということだと思う。真実を話すことが、自分自身に対して真実であるための重要なステップだと思う。時には私たちは何が一体何が正しいことで、何が間違っていて、何が本当で、何が本当ではないのだろうと思う場面もあると思う。そういう場面で識別力を行使していかなければならないと思う。そして、もし何が正しいかを見分けることが難しいときには、ただどちらの方がスワミをハッピーにするだろうかという思いをとおして判断すること。それが、何が正しくて何が間違っているかを見分けるための一つの方法で、それに従って行動すれば良いと思う。そうして真実を見分けていくことが、私たちにとって正しいことを話すモチベーションを与えてくれると思う。」

「まず自分自身に対して正直である必要がある。自分に正直ということは思いと言葉と行動が一致しているということ。そして人々に対して良い行いをするためにすべての力を活用することだと思う。スワミはいつも善良でありなさいとおっしゃっているが、私たちはすべてのエネルギーを他者への奉仕に使っていくべきだと思う。最初はそうしようとすると色々な問題に出くわすでしょうとスワミもおっしゃっている。たとえそのような問題に直面したとしても、私たちがそこで正しい意図を持ち続けることができれば、間違いなくそれに成功すると思う。そのことが私たちをより善い人間にしてくれると思う。実際にその試みに成功したときには、それが私たちに喜びを与えてくれ、さらに良い行いをしたくなる。繰り返すと、自分自身に正直であることと、自分自身の思い・言葉・行動を一致させる自分の中の一体性が必要になる。そして、そのように歩みを進めていくと神実現に近づいていくと思う。」

＜ババ様の御言葉＞

あなたにも他の人々にも苦痛を与えないもの、それが正しいものであり、それがダルマです。ですから、あなたが喜びを手に入れ、他の人々も喜びを手に入れるような方法で行動しなさい。あるいは、あなたの行為に別の基準を設けなさい。マナス〔心〕とヴァーク〔発言〕とカーヤム〔体〕（思いと言葉と行動）を一致させなさい。言い換えれば、話すとおりに行動し、感じたとおりに話しなさい。あなたの内なる良心を裏切ってはなりません。嘘というマントであなたの思いを覆い隠してはなりません。あなたの内なる良心を強引に隷属させて抑圧したり、良心が認めない行動に着手したりしてはなりません。それがダルマにかなった生き方です。何度も正しいことを行っていれば、それはますます容易になり、習慣は成長して良心となります。ひとたび自らを正しい行為に定めれば、あなたは自動的に正しいことに従うようになります。あなたが何をするかは、あなたがどういう人であるかによって決まります。あなたがどういう人であるかは、あなたが何をするかによって決まります。

１９６２年１０月５日

※１プラフラーダ：ヴィシュヌ神をナラシンハ（人獅子）として化身させた偉大な少年。さまざまな拷問にあいながら神への信仰を捨てなかった。
※２ドゥルヴァ：父親の愛を得るために一心に神を念じた少年、マヌ法典を記したマヌの長男ウッターナパーダ王の息子。ババの御講話によると、ウッターナパーダにはスニーティとスルチという二人の妻があり、スニーティはドゥルヴァを産み、スルチはその半年後にウッタマを産んだ。王は若いスルチを寵愛し、スニーティをおろそかにしていた。ドゥルヴァが五歳のとき、ウッタマと同じように父である王のひざの上に座ろうとしたところ、王のひざに乗れるのはスルチから生まれた息子だけであるとスルチにののしられた。その後、ドゥルヴァは母スニーティの助言に従って、神の恩寵を得るために森に入り、聖者ナーラダに授けられた「オーム　ナモー　バガヴァテー　ヴァースデーヴァーヤ」というマントラをひたすら唱え続け、ナーラーヤナ神の姿を念じた。
※３スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
※４ガーヤトリーマントラ：太陽神に捧げられる讃歌。https://veda.sathyasai.or.jp/gayatri
※５ブラフマプラカーシャ：ブラフマの光輝
※６ダルシャン：聖者や神を拝見すること。
※７アナンタプル：サイ大学の女子大のあるアナンタプル県の町。アナントプル。
※８オーム　シュリー　サイ　ラム：サイ ババの信者が改まった席での挨拶などとして使う文言。オームは原初の音なる聖音、シュリーは男性につける敬称、サイはサイ ババのサイ、ラムはラーマ神の意。（この文ではシュリーが省略されている。）
※９リキタ　ジャパ：書くことによるジャパ。霊性修行の一つで、繰り返し神の御名を書くこと。修行者の心と神の心を一つにするための行。ジャパム（テルグ語）
※１０ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。
※１１カリの時代（カリユガ）：法の力が４分の３失われた闘争の時代
※１２ミーラー・バーイー：ミーラ・バーイ　ミラ・バイ1547-1614あるいは1498-1563 メワール王国の都チットール（ウダイプルに遷都される前の都）のマハーラナ（藩主）の妃で、クリシュナ神の偉大な帰依者。王家を出てからは吟遊詩人となり神への歌を歌って徘徊した。
※１３クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身　純粋な愛の具現。
※１４プラシャーンティ・ニラヤム：プッタパルティにあるサイ ババの住まいとアシュラムの総称、至高の平安の館の意。
※１５ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。
※１６ランカー：『ラーマーヤナ』の悪鬼ラーヴァナの王国。
※１７バジャ ゴーヴィンダム：アーディ・シャンカラがサンスクリット語で著した神への讃歌。優れた不二一元論の網要とされる。

開催日：２０２２年２月３日（木）
テーマ：プレーマヴァーヒニー第13節、22節「真理と識別心という道によって神に到達しなさい」、「永遠の真理という知識を追い求めなさい」
参加者：39名

質問：
① 真の知識（ヴィッディヤー）をどのように絶えず覚えていることができるのか、どのように神へ至る規律ある生活を送ることができるのか？
② 今日の人々が霊性教育を学ぶことを恥ずかしく思う原因はどこにあるのか？予見者たちが示した堂々とした姿勢はどのようにして得られるのか？

＜参加者のコメント＞

… ① 真の知識（ヴィッディヤー）をどのように絶えず覚えていることができるのか、どのように神へ至る規律ある生活を送ることができるのか？

「世俗の知識は実生活で役立ったり、知らないと恥をかいたりもするので常に意識している状態。一方で霊性の知識こそは大切なものだが、目に見えないのでどうしても意識の外に置かれてしまうのではないか。例えばスタディーサークルでもヴェーダ※１でもあえて努力をして、意識することによって内面の幸せを感じる。そういう内面の幸せを求めることによって内面の知識を覚えていることができるのではないかと思う。」

「１年ぐらい前からテレビを見なくなり、その結果すごく平安を感じられる様になった。そしてコロナ禍でスワミの御教えの朗読会が始まった。しかし私は朗読が下手なので、練習するのに録音を取っている。スワミ※２のヴァーヒニ　シリーズ※３を夜眠れない時に聞くようにした。その時にすごくスワミの御講話が頭に入って『そうだな』と思いながら眠る。このような方法も良いと思う。」

「私の場合、スタディーサークルに参加すると、必ず何かの新しい規律や新たに気付きが必ずある。しかもそれがその時の自分にとって適切なものであることが多い。それは神が提供してくださったものなのだと思う。つまり、サットサング※４で神からのインスピレーションを受けながら、新たな規律に自分で気付いて、それに沿って日々を送ることが一番大切ではないかと思う。」

… ② 今日の人々が霊性教育を学ぶことを恥ずかしく思う原因はどこにあるのか？予見者たちが示した堂々とした姿勢はどのようにして得られるのか？

「霊性修行をすると自分の内面に目が向くようになる。私もそうだが人に対してこうやったらいいと目が外に向いてしまい、親の立場だと上からものを見てしまう。しかし霊性修行は自分のことを見るので、いざやると自分はこうだったので、悪かった、ごめんなさいと恥ずかしく感じる。予見者たちというのは自分に非がないので、自分を見ても恥ずかしいところがないので堂々としていられるのかなと思った。」

「私の近しい人は私がサイ・ババを尊敬していることを100%知っている。彼らと話しているとき、サイ・ババのことを話した方がスムーズに話が流れるときにはそのようにしている。恥ずかしいというのは、スワミの御教えを学んでいるのに、自分ができていないものを言葉だけを言うと、結局スワミの価値を下げてしまう気がする。」

＜サイの学生のコメント＞

… ① 真の知識（ヴィッディヤー）をどのように絶えず覚えていることができるのか、どのように神へ至る規律ある生活を送ることができるのか？

「もし私たちが霊的な活動を行った後で得られるインセンティブがはっきりと分からないなら、スワミが語っていることしっかり読むことだと思

う。スワミは『何も疑問を抱いてはいけません』、『何もインセンティブを求めてはいけません』、『少なくとも一つの指示にしっかりと従ってトライしてください』とはっきりとおっしゃっている。数えきれないほど何百万回失敗しても決して諦めないでトライしてくださいと。霊的な活動のインセンティブはそれを実践する人が得ることができる。（中略）霊的な教育の効果は体験することによって得られるもので、他の人がそれを見て得られるかといえば“NO”だと思う。皆が自分自身を評価して、どれぐらいの時間を霊性修行に費して献身しているのかを評価すれば、霊的な教育へのコミットメントが増えていくだろうと思う」

「本当のヴィッディヤーは何なのか自分の考えを少し述べたい。この世界では、大抵興味をもっていることを得るのには、多くの努力を必要としない。しかし、ヴィッディヤーを得るには単に興味をもって行うより、もう少し違うことをしなければならない。それには霊性修行をしなければならない。本当のヴィッディヤーとは、神を知って融合していくこと。神の方に向かい、神になることに対して努力を注がなくてはならない。世俗的な努力とは違う種類の努力になる。それは瞑想やバジャン(神への讃歌)、誰かを助けることや奉仕など。真の知識を得るためには継続的に自己研鑽しなくてはならない。そうして初めて本当のヴィッディヤーが自然に意識の中に植えつけられると思う。この世の知識を得ることと違い、真の知識を得るためには特別な努力の必要が生じてくる。」

「スワミがおっしゃっているのは、食物はすべての感覚と関係していており、さらには見るもの、聴くもの、感覚器から取り入れるものもまた、食物といえるということ。私たちが霊的成長のための活動に取り組んだとしとも、そこかから１００％の利益を得られないのだとしたら、それは私たちの感覚器の誤用に原因がある場合が考えられる。だからまず感覚から取り入れているものを、すべて清めていく必要がある。（中略）皆一人ひとり生活環境が違うので、必ずしもすべての霊的な活動に関わることができるわけではないと思う。ある帰依者の方はバジャンが非常に上手で、それを通して神と繋がれる人であったりするかもしれない。ある人は瞑想をとおしてだったり、あるいはナーマスマラナ(神の御名の憶持)をとおしてという人がいると思う。自分の場合は例えばナーマスマラナをしているが、自分のバックグラウンドとして何故ナーマスマラナをしているのかということを明らかにして、理解する必要がある。本当に一度やることを決めて、それを続けていったなら、自分が選んだ活動を続けていくことによって、より良い習慣を培うことに繋がり、成果に繋がっていくと思う。それが神を達成するために取るべき方法ではないかと思う。」

「人生の中で何を達成するにも規律がとても大事。ライフスタイルは習慣によって決まるとスワミはおっしゃっているが、そこで大事なことは、どのように良い習慣を培って、どのように悪い習慣を止めるかということ。心理学が教えていることは、どんなことであれ21日間続けたら習慣になるといわれている。新たな習慣を身に着けるには、小さな小さなステップから始めていくことが実践的には大事。私たちはどんな言語も一日で喋れるようになることはない。最初はアルファベットから学ぶ必要がある。それと同じように意識的な努力を毎日することが大事。毎日の努力の継続により、それが習慣に変わっていくと思う。そして、そのようにして得られた良い習慣が、良い方向へと繋がっていく。この様な背景のもと、スワミはヴィヴェーカ（識別）が非常に重要とおっしゃっている。自分の習慣について、これは良い習慣か、悪い習慣なのだろうかと自分自身に問いなさいということ。また同様に、良い方向へ向かっているか、何が悪い方向性なのだろうか問うことも大切。良い方向というのは、スワミの方へ連れて行ってくれる方向。当然、その方向性は私たちに幸せを与えてくれる。それは一時的な幸せではなく、最終的な目的地へと繋がっていく、永続的な意味で

の幸せ。もし私たちの努力が正しい方向であることを識別をとおして分かったのなら、その努力を規則正しいものにしていくことができる。そして、努力が規則正しいものとなれば、それが習慣になる。それが習慣になれば、それは規律に変わる。それを実践して初めて、これが良いとか悪いとか、体験して理解し、それが実際に自分をどこに連れていってくれるものなのかが分かる。そういった理解が私たちがさらなる良い習慣を手にすることに繋がっていく。」

… ② 今日の人々が霊性教育を学ぶことを恥ずかしく思う原因はどこにあるのか？予見者たちが示した堂々とした姿勢はどのようにして得られるのか？

「霊性という言葉の意味や情報が、世の中に間違って伝わっていたり誤解があると思う。例えば霊的なことに関して、神様の超常現象を信じますか？などと問われたりする。霊的なことを信じない人々は、目に見えないものに対してなぜ従っていくのだろうと思ったりする。同じような誤解として、神様を信じる理由は自分に自信がないから、神様を信じて頼ったりするのだろうと考える人々がいる。しかし現実には、霊的求道者と呼ばれている人々は、霊的でないどんな人よりも自信にあふれている。一番初めに大事なことは、霊的な求道者たち自身が、霊的であるとはどういうことかという知識をしっかり得ることだと思う。霊的求道者が気づいて理解しなければならないことは、本当の霊性とは自分自身のことをより良く理解するということ。神を信じない人から見ると求道者たちは皆、神を探しているように見えるが、実際には求道者たちは神を探しているのではなくて、どこにでも神を体験している。一度その違いを真に理解したのなら、自ずと態度も大胆なものになっていくだろうと思う。それは自然にそうなると思う。また、科学的に言っても、霊性を理解する人々の方が、理解しない人々よりも幸せであるという事実がある。だから何か問題がやってきたとしてもそれによって落ち込んだりするのはなく、それもまた神からのギフトであると考えて楽しむことができるようになる。真の霊性求道者としての立場を理解したのなら、何も恥ずかしがることはなくなると思う。」

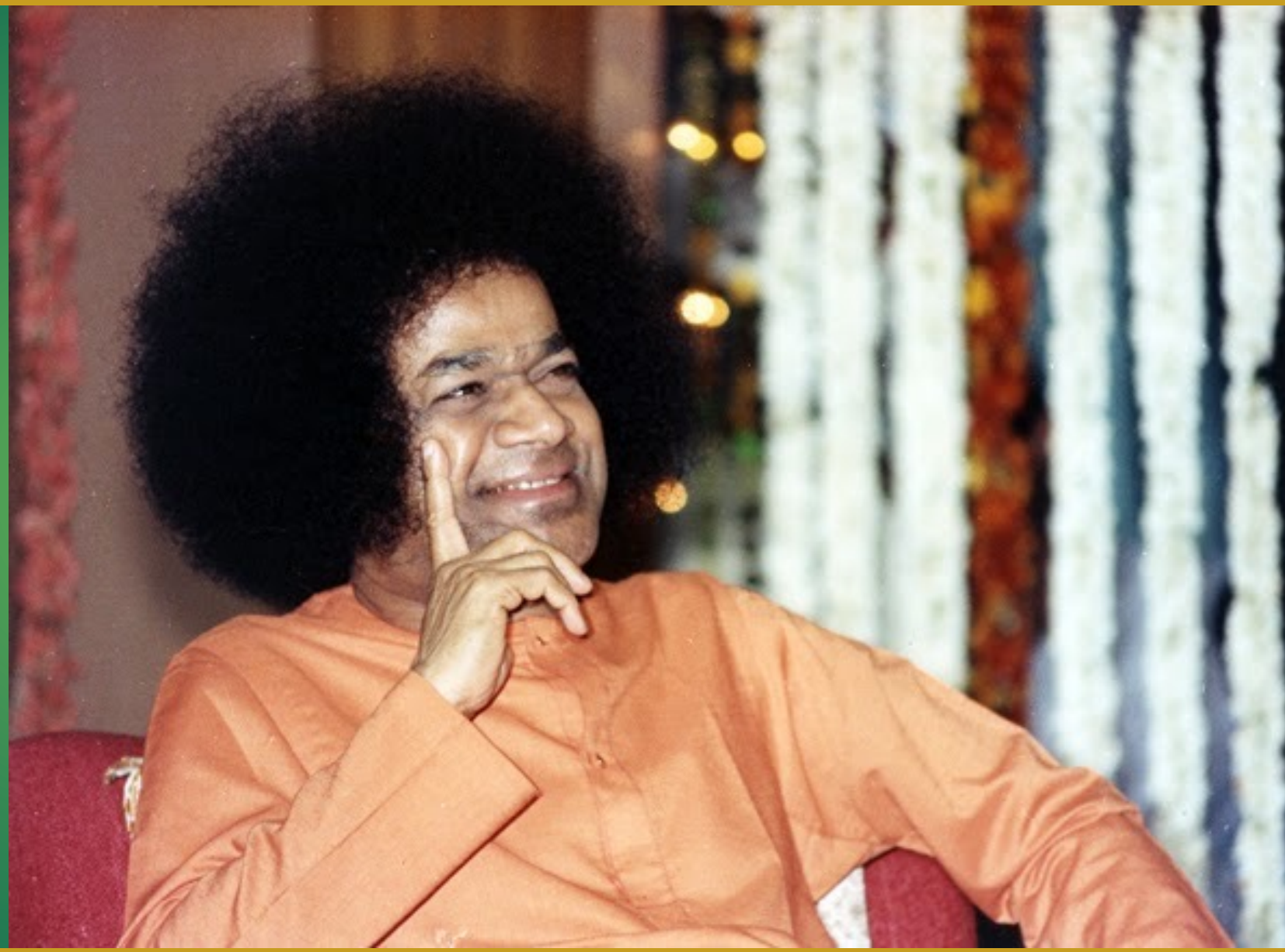
「（世の中において霊的なことを）なぜ恥ずかしく思うかというと、霊性が一番大事なものだと思っていないのでそう思うのだと思う。同時に霊性というのは実践するのが大変なもので、大変な規律を必要とするかのように理解されている。実際に霊性を理解したり体験しようとするのであれば、何もそのような複雑なものではない。霊性の唯一の目的は私たちがもともともっているような内なる善良さを目覚めさせるものにすぎない。霊性というものはまったく複雑なものではなく、日常生活の中でシンプルに実践していけるものだと考えるのであれば、より堂々とした姿勢でそうしていくことが可能になると思う。」

＜ババ様の御言葉＞

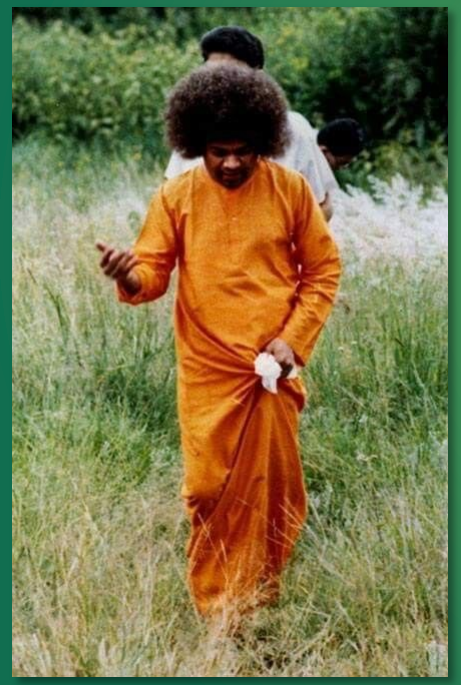
現代人は、世の中のさまざまな側面を研究したり調査したりしています。しかし、神性は研究や調査では体験できません。あなたの好む神の御姿を一つ選び、その御姿を憶念しなさい。その神の御姿に心を集中させる時、あなたの心は完全な変容を遂げて神性と一つになります。今、人の心は一瞬ごとに迷い続けています。揺れ動く心に頼ってはなりません。そうする代わりに、しっかりと安定している不変なる神性を信頼しなさい。ひとたびあなたが自分の選んだ神の一つの御姿に心を向けたなら、決してそれを変えてはなりません。目を閉じて、その御姿を憶念しなさい。そうして初めて、あなたは神性を体験できるのです。

２００４年１１月２２日

※１ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。
※２スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
※３ヴァーヒニ シリーズ：インド発行の月刊誌、サナータナ　サーラティ誌にテルグ語と英訳で連載されたサティヤ　サイババの著作。
※４サットサング：善人との親交、神との親交、善い仲間と共に過ごすこと、善い仲間に加わること。



＜活動報告＞



千葉センター

発足３２周年記念祭報告

オーム シュリ サイ ラム
ババ様の蓮華の御足にお祈りを捧げます。

今年で千葉センターは設立３２周年を迎えます。ババ様に感謝と祈りを捧げるため、５月１４日（日）に記念祭を開催いたしました。ゲストにBro. Tさん率いるサイ大学の卒業生８名をお招きして、スワミ※１の愛を味わう充実した1日となりました。

プログラムは午前中と午後に分かれて行われました。午前中はサイ大学の卒業生との交流会でした。卒業生の皆さんの自己紹介、なぜサイの大学を選んだのか？などをお伺いしました。

ほとんどの方が、幼い頃からババ様の帰依者で、ご両親や親戚もババ様と繋がりがあり、その流れの中で入学されるという、恵まれた環境だったことが多かったようです。ただしすべての方が簡単に入学できたわけではなく、紆余曲折を経てようやく入学できた方もいたようです。適切なタイミングでババ様の計画に基づいて、ババ様の元にお呼びになっているのがわかりました。しかし共通して言えるのは、日本の中でもババ様のセヴァ（奉仕）に携われることに喜びを味わっているようでした。

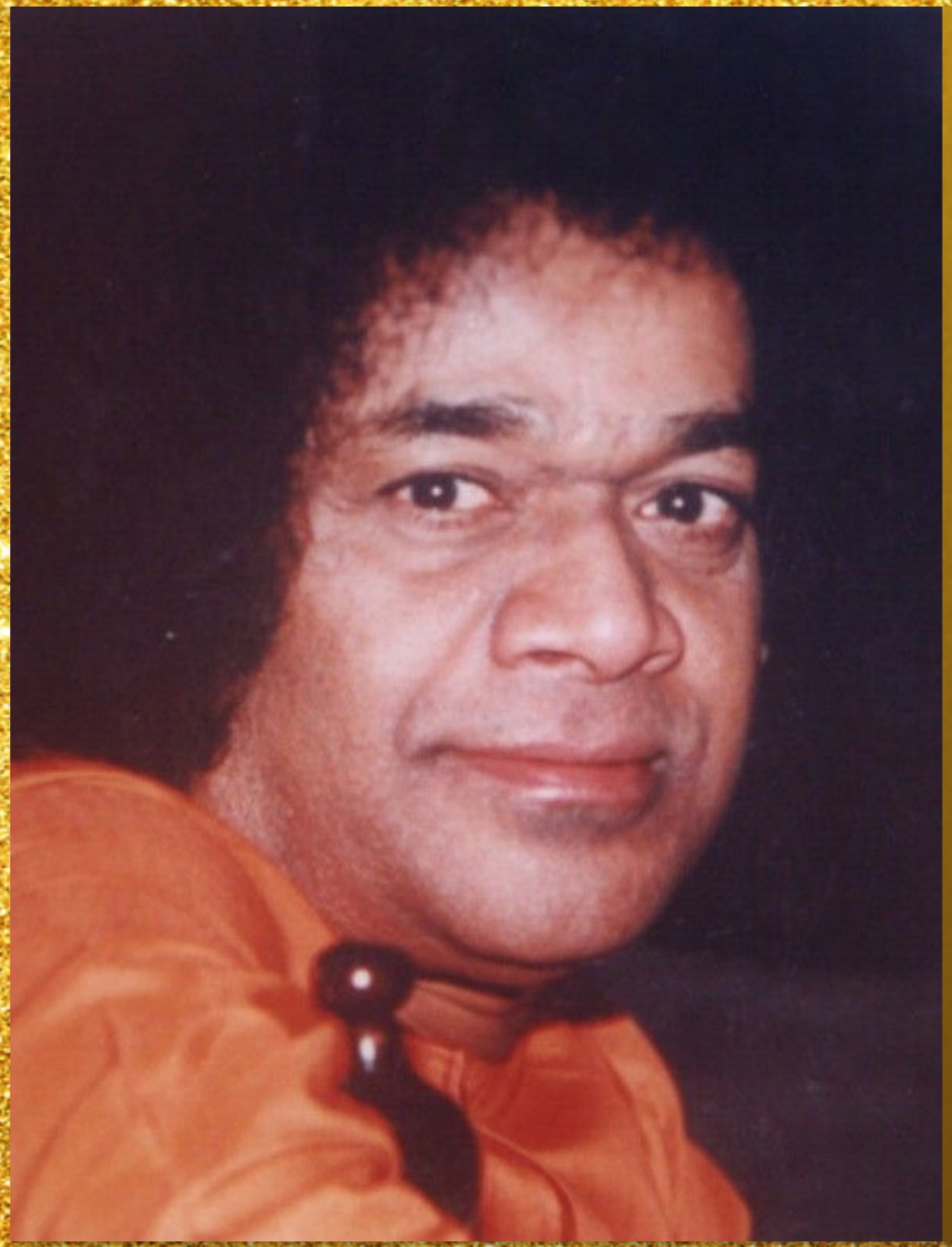
午後にはBro. Gさんにテルグ語勉強会を開いていただきました。テルグ語はババ様も使われていて、世界でも１６番目に使われている言語です。特徴としてはイタリア語と同じように全ての言葉が母音に終わるところだそうです。一人称、二人称、三人称の呼び方、数字の数え方など簡単なテルグ語を楽しく学ばせていただきました。その後テルグ語の“Mana Bangaru Parthi Baba（マナ　バンガール　パルティ　ババ）”のバジャン（神への讃歌）を教えていただきました。Bro. Tさんの発する美しいラーガ（インド音楽のメロディー）、Bro. Aさんが刻む完璧なターラ（リズム）、サイ大学卒業生の皆さんの「私たちの、黄金のプッタパルティ※２のババ様！」と呼びかけるバーヴァ（思い）が合わさり、美しいバジャンを奏でていました。途中、プラフラーダ※３のナーラーヤナ※４神に対する帰依心のお話や、ババ様との甘い体験談を聞かせていただきました。スワミのユーモア溢れる振る舞いや、帰依者を優しく導いてくださったお話を聞かせていただいた一方で、大きな教訓的なお話もいただきました。私たちは与えられたセヴァを行うことだけでは、スワミは満足してくださらない。セヴァをする機会を自ら探し出し、神様へ捧げなくてはならないと強調されていたのが印象的でした。

そしてプログラムの最後はヴェーダ※５チャンティング(詠唱)とバジャンをスワミに捧げました。サイ大学の卒業生に囲まれて捧げるバジャンやヴェーダは、まさにプッタパルティでスワミに捧げたことを思い出すことができて、スワミの愛に包まれた温かい空気に包まれることができました。

　そして当日、スワミはスペシャルゲストを送ってくださいました。Sさんご夫妻です。お二人は千葉センターと縁が深く、また私たち千葉センターのメンバーをいつも気にかけてくださり、適切なタイミングで適切なアドバイスや帰依者としての見本を示してくださいます。サイ大学の卒業生のお一人おひとりに対し、母親のような温かいまなざしで包み込んでくださっているのがとても印象的でした。サイ卒業生の皆さんは年齢は２０代前半の方々でしたが、千葉センターの歴史は３２年にもなります。今まではゲストに来ていただいた数々のサイ大学の卒業生から私たちが、スワミとの直接的な体験をシェアしていただくことがほとんどでした。今後は私たちが、Sさんご夫妻のようにスワミの手足となって、サイ大学の卒業生はもちろんのこと、これからの時代を作り上げていく若い世代に、スワミの愛を与えていけるようになりたいと思いました。

サイ ラム

※１スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
※２プッタパルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。
※３プラフラーダ：ヴィシュヌ神をナラシンハ（人獅子）として化身させた偉大な少年。さまざまな拷問にあいながら神への信仰を捨てなかった。
※４ナーラーヤナ：水の中で動く者の意、ヴィシュヌ神の別名。水の上で動く者の意、ブラフマー神の別名。宇宙をすみかとする者の意、原人の息子の意。
※５ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。



何も求めずあなたとゆこう
限りある命の中
御足を飾る神の花
蓮の花のように
瞳に永遠を
両手に祈りを
この胸にサイの愛を
サイ　サイ　サイ　あなたのもとへ
サイ　サイ　サイ　あなたとともに

アートマを基盤にした一体性を促進し、神性を憶念し、
公益のために行動すべきです。
人間的価値に従わずして、どうして自分を人間と呼べるでしょう？
今、差し迫って必要なのは、ヒューマンバリュー、
人間的価値です。
どうしたら人間的価値を育てることができるでしょう？
種は肥沃な土壌に植え付けられれば草木に成長します。
空き缶の中で種が芽を出すでしょうか？出しません。
人間的価値の種は、霊性という土壌の中でのみ成長できます。
肥沃で耐久性のある霊性の土壌がなければ、
人間性を強化することはできません。
神への愛に満ちた心（ハート）は、
養分をたっぷり含んだ土壌のようなものです。
そのような心（ハート）にあなたの種を蒔きなさい。

BABA

1995年夏期講習 シュリーマド・バーガヴァタムp 125

Jai Sai Ram